

堀場弘教授「日本建築大賞」受賞
福島加津也講師「日本建築学会賞（作品）」受賞
作品見学会「工学院大学 弓道場・ボクシング場」

如学会・研修交流ツアー・レポート

「金澤の最新建築と古都の風情と食の文化を訪ねる旅」

「建築 100 人展 2015 / 10 周年記念大学展
・美術館展」出展者募集

上野の森美術館にて初の建築展として
「建築 100 人展 2015 巡回展」開催予定

「建築 100 人展・10 周年記念誌」同時発刊

三木千壽学長講演会レポート&インタビュー
追悼・望月重名誉教授

「大林組技術研究所」見学会

「旧岩崎邸+東大本郷キャンパス」見学会

第3回「進路支援プログラム」予告

「夏期特別講義」報告

「赤レンガ卒業設計展」レポート

「女流ファイル」PART・12

第3回「社会をデザインする先駆者が語る」

如学会 2015 年度定期総会・講演会・懇親会報告

去る6月6日（土）開催の定期総会において再選され、11代目如学会会長の2期目として、向う3年間務めることとなりました。過去3年間、1期目では新体制の確立とともに、新しい4つのプログラムを軸に試行錯誤を繰り返してきました。その経験と実績をもとに、今後一層の如学会の発展に尽力していきたいと思っておりますので、新体制を支える役員・スタッフ共々よろしくお願ひ申し上げます。今年度の予定行事は以下の通りになっておりますので、如学会員の皆様の積極的なご参加をお願い申し上げます。

■「定期総会・講演会・懇親会」2015年6月6日開催
／来年度：2016年6月4日開催予定
今年度は総会、講演会、懇親会に91名が参加。

■「金沢・都市建築視察ツアー」
2015年3月14日－15日（1泊2日）開催
35名の方が参加、新幹線金沢線開通初日に、金沢市と近郊の話題の建築を訪ね、校友会金沢支部の方々20名と共に、懇親会を行ないました。
今年度は北海道新幹線開通初日に、「函館・都市建築ツアー」を2016年3月中旬に実施予定です。

■「進路ガイダンス／進路支援プログラム」
2015年11月25日開催予定
昨年度は72社計150名のOB・OGと学生達約150名の計約300人が集合し、大変な熱気に溢れたものでした。その後、多くの学生がインターンシップとして会社を訪ね、就職に良成績をおさめました。

■「建築100人展 2015・大学展／美術館展」
大学展：2015年10月31日－11月1日開催
美術館展：2015年12月16日－24日開催
昨年度の大学展では152名の出展者を数え、開催初日には「ウクライナ建築視察団」（財団・教授・大学生・TV局他）計40名の見学者を迎えて、大変賑やかな国際交流の場と

山岡嘉彌

(S46 卒)

如学会会長

如学会の活動報告



なりました。（大学のHPにも掲載）今年度は「建築100人展・10周年記念展」として、「大学展」、「美術館展」を企画しています。「美術館展」は、上野の森美術館で開催予定で10周年記念誌も発刊予定です。

■10年目の「夏期特別講義」2015年8月1日－6日(2日休講)開催。本年度より聴講対象学年を1学年上げ2年生を中心としました。本年も、建築学科のOB・OG18名に「特別講師」を委嘱、1コマ90分の授業を受け持ち、大学では学べない社会の実務を学生が学べる機会をつくりました。

■「資格支援プログラム」（一級建築士、一般施工管理技士、宅地建物取引主任資格など）継続中
数々の資格取得を支援するための、卒業生による指導と、資格取得専門教育機関との授業料の減免措置を継続しております。

■「被災地支援プログラム」
「被災地支援視察スタディツアー」2015年10月実施予定
校友会共催で、建築学科名誉教授・住吉洋二先生のご案内のもと、山形県金山町視察と共に実施予定です。

■「如学会NEWS・2015秋号／2016春号」の発行
カラー印刷の価格がこなれてきている昨今であり、前号より校友会からの支援費支給の一部を活用し、表・裏表紙のみカラーで作成することができるようになりました。

■「産学連携プログラム」
今年度から実施するために、事前の調査、検討を始めており、大学、学科教室と同窓生の所属する企業、官公庁との連携による新しい試みを徐々に進めて行く予定です。

■他に毎年恒例のOB・OGの設計による作品を見学する「作品見学会」は8月22日（土）「工学院大学弓道場・ボクシング場」を見学、研究機関訪問の「技術研修会」は、「大林組技術研究所」見学を6月26日に実施しました。

今後とも会員の皆様のご協力、ご支援をよろしくお願ひ致します。

■学生動向

2015年4月に入学した学部生は115名と、ほぼ例年通りの人数でした。ただ女性が39人で、1年生全体の34%、3人に1人が女性となりました。建築学科の在籍者総数は495名（内女子138名）となり女性の比率は28%ですので、1年生女性比はかなり高くなりました。
大学院生の入学者は28名内（女子5名）で昨年から比べますと減少しました。就職の状況や良いので、優秀な4年生も院に進学せず就職してしまうケースも多いです。建築学科としては、就職が良いのはうれしいですが、院進学者が少ないのが残念です。

特にエンジニアリング系の院進学者が減少しているのが気になります。

■建築学科人事

建築学科教室の人事には変更がありませんが、濱本卓司先生が今年度(2016年3月)で定年退職となります。濱本先生の後任人事を公募で進めております。

■B I M教育

学内の「2015年度 戦略的施策 教育改革推進」事業で、建築学科の「B I M教育環境導入」として教育研究費が予算化されました。

2015年度後期内でB I Mにつきまして、皆さんのご意見をお聞きすることもあるかと思えます。その際には、アドバイスをお願い致します。

本学建築学科はB I M教育で最先端を目指したいと思います。

勝又英明

(S55 卒)

東京都市大学
建築学科主任教授

建築学科の近況



■建築事務室担当が黒木さんから宇野さんに

建築事務室の建築学科担当の黒木留見子さんが研究推進部地域連携センターへ異動となりました。替わって、宇野直子さんが建築学科教室事務室へ異動となりました。宇野さんは、以前都市工学科事務室の担当でした。建築学科と都市工学科は4号館2階で同室となっていますので、宇野さんについては以前から顔を交わしており、よく知っていました。建築学科教室に馴染みのある宇野さんが異動で建築学科教室事務室に来られたのはよかったです。黒木さんは永年に渡り建築学科教室、在学生、卒業生の面倒を見ていただきました。特に就職の面では各企業との窓口となり、黒木さんはまさに建築学科の「就職の顔」と言えました。黒木さんが異動になったのは教室にとって痛手です。幸い宇野さんが黒木さんと密に連絡を取って頂いているようなので学科教室はスムーズに運営されています。お二人とも今後ともよろしくお願ひいたします。

■TAP始動

今年度1年生から留学プログラムであるTAPが始まりました。大学のパンフレットによれば『「東京都市大学オーストラリアプログラム（TAP）」は、(中略)1年次の準備教育と2年次5か月間の留学を合わせた2年に亘る本学独自の国際人育成プログラムです。（後略）』今年度の1年生の希望者が2年次の際に留学するもので、全学的には約200人、建築学科からは約14名が参加予定です。在学4年間の中で約半年も留学できるという画期的なプログラムです。履修には多少苦勞がありますが、建築学科としても国際的な建築専門家が育てられるのではないかと期待しています。

TOPICS

如学会講演会

於：渋谷エクセルホテル東急

講演

三木千壽氏

東京都市大学 学長

2015年6月6日、2015年度如学会定期総会を開催後、「社会インフラの老朽化を考える」と題し、三木千壽学長による講演会が渋谷エクセルホテル東急にて、開催された。

三木学長は1970年に東京工業大学 土木工学科卒業後、構造工学、橋梁工学などを専門に、多大な功績をあげてこられ、特に、都市構造物、橋梁における疲労、強度、メンテナンスに関する研究と、技術の社会的役割に関する知見を著作物や国家レベルの有識者会議等において周知、提言し、大きな社会貢献を果たされている。

今回の講演会では、余すことなく経験とお考えがにじみ出た講演となり、聴衆を引き付けてやまないの



講演される三木学長

「社会インフラの老朽化を考える」

レポート ●舟岡 努 (S52 卒)
舟岡技術士事務所



会場の様子



熱い講演と聞き入る聴衆

えるのか、そもそも、構造物の劣化や疲労を考慮していなかったのではないか。したがって、技術、技術者、制度のいずれでも対応が取れていなかった。2012年笹子トンネル事故で社会問題化した老朽化問題であるが、疲労損傷は1980年代より顕在化していた。道路構造物についての検討委員会や有識者会議で予防保全について検討、提言が行われ、2013年の道路法の改定により、ようやくメンテナンスは法的な根拠の下で義務化された。今、本格的なメンテナンスの実施に舵を切るときと提言された。

■米国では ― 見習うべきこと

米国は日本より30年早く、橋梁の建設ラッシュが始まっており、鉄道橋は100年を超えているものも多く、高齢化を早く迎えている。1981年発表された「AMERICA IN RUINS」で警告された状況は、日本のほうが深刻。その理由は、管理側、国民いずれも認識がないからである。米国の素早い対応と政策への反映を見習いたい。

■点検診断の高度化

有効なメンテナンスには、時間とともに変化する保有性能が限界値に対してどの程度なのかを知り、適時・適切な補修が必要である。そのためには、点検・診断の高度化研究と技術開発が欠かせない。性能の変化していく点検レベルに応じて、「①データベース化評価と見える化 ②点検、計測、診断技術の開発、支援システムとしての整理 ③劣化進行のセンシングとモニタリング ④補修・補強技術、新技術 ⑤限界状態

態の防止のためのモニタリング⑤限界状態防止のためのモニタリング」が必要となってくる。

現状の点検作業は、ルーティンワークとなっており、形骸化と技術の停滞がみられる。点検と診断のプロの育成が重要で、まず、管理者側の技術者から育成を始める必要がある。また、民間の点検技術者の育成とレベルアップも大きな課題である、今まではメンテナンスがビジネスにならず、技術者は軽視されてしまい、技術の高さも評価されず、モチベーションも上がらない。今後、早期発見技術が実現したら工事にもつながらず、高い技術に対する対価をどうするかを考えなければならない。土木学会2000年のレポートでは、技術者のフィービジネス化が提案されている。

■新しい技術

関心をもつべき新しい技術を紹介する。

・解析・設計・・・ボーイング777のweight testでは、安全率が1.5～1.6の間とならなければならない。安全側過ぎるのは自慢にならないのである。
・材料・・・鉄や鋼の結晶組織の変遷と最新の材料
・センシングとモニタリング・・・たとえば、傷を受けたら自分で痛いというような、「Smart Bridge」

技術の話題では楽しそうに熱弁されていたのが印象的で、引き込まれた。時間の制約から、技術の具体的な説明を割愛いただいたことは、申し訳なく、また後ろ髪をひかれる思いであった。社会の発展とこれに関わる研究者、技術者のあるべき姿をお示しいただいた、貴重なご講演であった。



東京都市大学の変革と卒業生の役割

聞き手：山岡嘉彌（S46 卒）
文 責：山口裕照（H10 卒）

2014年度に始動した中長期計画「東京都市大学アクションプラン2030」に基づき、新たな人材育成プログラムなどが本格的に動き出しています。この変革期に10代目の学長に就き、大学運営のかじ取りを託された三木千壽先生は「大学は教育研究機関であり、教育と研究を通して学生たちに夢を描かせ、それを実現する力を持たせる必要があります」と強調する。さらに「東京都市大学を強くするためファイティングポーズを取ってほしい」とも訴える。三木学長にお話を伺いました。

——建築学科の活動をどのように見られていますか。

学生、教員、卒業生がさまざまな場面や分野で、活発に活動しているという印象が強いです。特に先輩が後輩の面倒をよくみていると思います。卒業生や教員がそれぞれの仕事で活躍し、社会的にも評価を受けて多くの賞を受賞しています。こうして自分たちの姿を学生に見せることは非常に大切なことです。建築学科はそれがうまくいっていると感じています。

特にアーキテクトの活躍が目立つことです。学生全員がアーキテクトになれるわけではなく、それに対する適性もあるでしょう。私自身も学生時代に清家清先生の研究室で図面を拝見した時、1本の線のすごさに驚き、建築家にはなれないなと思いました。それで橋梁の世界に進んだのかもしれません。

欧米ではアーキテクトとエンジニアは別々に教育を受けますが、日本は共に学ぶ、分野横断型の教育が行われています。これが日本の建築教育の良さであり、強みにもなっていると思います。アーキテクチュアとエンジニアリングの教育をバランスさせることで、建築学科は強くなっていくと考えています。

——大学を取り巻く状況について。

現在、学生の質が大きく変わっています。もっとはっきり言うと学生の偏差値が下がり、武蔵工業大学全盛期に滑り止めだった大学に負けています。この現状に対して「恥ずかしいのか」と教職員には大きな声で言っていますし、卒業生のみなさんにも真剣に考えていただきたいと思っています。

本学で最も活発な建築学科には、東京都市大学としての「見せ方」、他大学と比べた時の「見え方」にもう一工夫してほしい。建築学科はその活躍が外からはよく見えるけれど、大学の中で建築学科はどう見えているのか、またどのように見せるのかという視点での議論や行動が不足しているのではないのでしょうか。建築学科を工学部から切り離して学生を集めている大学もありますが、私は実力的にははるかに高い都市大の建築は他の学部・学科と組み合わせて対外的に打って出る

べきだと考えています。

例えば、横浜キャンパスと等々力キャンパスの中で建築と関連する学部・学科と一緒になれば、大きなパワーが生まれます。もしも建築学科と都市工学科が一体となれば、ものすごいことが起こります。

実は学長の要請を受けた時、中村英夫先生（元学長）から「都市大を強くしてくれ」と頼まりました。18歳人口が着実に減少していく中、他大学ではいろいろな工夫や挑戦をしています。本学も強みをさらに磨くとともに、弱さを改善していかなければいけません。その弱みの一つが、おとなしさです。学生や教職員は外に向かって戦いを仕掛けません。本学を活性化するため、また良くするためにも、現状をしっかりと捉えてもっと関心を持ち、ファイティングポーズを取るべきだと思います。

——大学はどう変わっていかないといけないのですか。

以前、文部科学省が世界最高水準の研究教育拠点を形成し、研究水準の向上と世界をリードする創造的な人材育成を図るため実施した助成金事業「21世紀COEプログラム」や「グローバルCOEプログラム」に応募しようとしていたが、実際にはできなかった。採択された大学の中には、本学クラスの大学も数多く含まれています。これでは本学はどんどん遅れてしまう。

大きなプロジェクトにチャレンジするには、組織がタフでなければいけません。多様な人材、多彩な発想にあふれ、世の中の動向を速やかに的確に捉える組織にならなくては駄目です。そのためには「まとまる」ことが必要になります。

私自身も大学に勤めてきたので、分野や領域を越えてまとまることの大変さは十分に理解しています。でも今やらなくてはいけないし、教職員がもっとその気になって立ち上がってほしいです。

産業界では「学士ではなく修士レベルの人材」を求めています。教育界もそれに合わせるべきで、特に工学系は大学院を基本にしていく必要があります。学生たちをどんな姿で、どういう所に送り出すのが大事です。単に就職できれば良いでは駄目なのです。

進学したい人が大学院に進むという時代ではなくなっているのかもしれませんが。実際に教えることも増えていきますし、専門を重視し過ぎるのも良くありません。教養をしっかりと学ばせないといけない。歴史が分からない日本人は海外で役に立たないということを経験した方も少なくないはずです。実学は教養がないと語れない

のです。

文部科学省の有識者会議の中で、グローバル人材を生み出すトップ大学数校をG型大学、その他多くをローカル大学（L型大学）と位置付け、現在の大学制度を見直すという意見が挙がっています。さらに政府は大学を「世界競争」「世界協調」「地域貢献」の三つに分類しようと考えています。これは一部のトップ校を除いて、ほとんどの大学が職業訓練校になるという最悪なシナリオです。こうした状況の下、東京都市大学はどの道を選択し、歩んでいくのが問われているのです。

——建築学科への要望や期待は。

本学では中長期計画の「東京都市大学アクションプラン2030」に基づいて改革を進めているところです。2019年に迎える創立90周年、2029年の創立100周年に目指す大学像を明確化し、教育や研究、大学運営、キャンパスなどすべてについて改革プランが示されています。この中で、すべての学科に「ディプロマポリシー」「カリキュラムポリシー」「アドミッションポリシー」を体系的にまとめるよう求めています。三つのポリシーを徹底的に考えることで、面白いアイデアが生まれ、見えてくると思っています。

欧米のように5年制の建築教育を議論している大学があります。国際性をにらんで卒業生を出していくために、建築学科で5年制の動きが出てよいのではないだろうか。本学が強くなる起死回生の発想がほしいし、本学を引っ張っていく戦略を考えてもらいたいです。

建築学科のパワーに期待しています。

——学生や大学に対して卒業生はどんな役割を担えるのか。

卒業生には現在の学科運営に対して、もっと発言してもらいたいです。「昔は良かった」というのは最悪ですが、「ちょっとレベルが落ちているのでは」などと刺激してほしい。

ところで卒業生のうち何人くらい建築士資格を受験し、取得しているのでしょうか。柏門技術士会からは、ここ数年、受験者も合格者も減っています。資格を受験するよう促すのも卒業生の役割だと思います。是非とも学生たちによりプレッシャーを与え続けていただきたいです。如学会にはそんな活動も期待しています。

三木 千壽 氏 東京都市大学 学長 MIKI Chitoshi

〈略歴〉1970年 東京工業大学卒業、1980年 東京大学助教授、1990年 東京工業大学教授、2003年 東京工業大学工学部長、理工学研究科長、2005年 東京工業大学副学長、2012年 東京工業大学名誉教授、東京都市大学教授、2013年 東京都市大学副学長、2015年 東京都市大学学長

〈受賞〉土木学会 論文賞
土木学会 田中賞
溶接学会 業績賞
日本構造協会 協会賞
Ernst GaBner Award
〈著書〉「橋梁の疲労と破壊」（朝倉書店）
「現代の橋梁工学」（理数工学社）
「鋼構造」（共立出版）

堀場弘教授 日本建築大賞 受賞！ 福島加津也講師 日本建築学会賞

各賞受賞のおふたりに自らの受賞について語っていただきました。

日本建築大賞

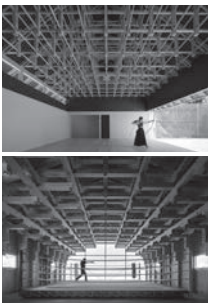
堀場弘 (S58 卒) 東京都市大学教授

「山鹿市立山鹿小学校」

大変ありがたいことに山鹿小学校で今年度 JIA 日本建築大賞を受賞することができました。この小学校は明治からある小学校の統合に合わせた建替えて、8000㎡以上ある大規模な木造建築であることに特徴があります。古い伝統のある街の中心部の神社の境内とつながる特別な場所にあります。もともと学校のグラウンドでは千人灯籠祭りという地域の盛大なお祭りが催されたり、日常的にも校内を通り抜けたりと、学校は地域と深いつながりをもっていました。これらを整理し通り抜けの街路「学びの道」をつくり、美しい千人灯籠まつりの舞台を演出できる配置としました。また、この地域は杉の産地としても知られ良質の材料が調達できることから、集成材ではなく製材で大規模な建築に挑戦しました。教室は、住宅に比べて大きなスパンを飛ばさなければいけないし、体育館をはじめそれ以外にも大スパンを成立させなければなりません。そして

構造家とともに考えた南京玉すだれ構造は、教室では105 角の材料を使用して全体のアーチ効果を狙って少しずつずらしながら架け渡す構造で、図書室、体育館など他の場所でも同じシステムで成立させることができました。地元の材料で、地元の大工によってつくる地域の学校というのがキャッチフレーズになっていきました。建築をつくることの影響力の大きさを感ずることもありました。この美しい架構は、子供たちに元気を与え、地域の人たちにも勇気を与えたに違いありません。こうしたプロセスを含めた建築のちからについて、評価いただけたのではないかと思います。建築には様々なちからがあり、それはなかなか見えてこないことが多いのですが、今回は幸運にも実現することができました。2011 年からは母校で設計系の教員として後輩を指導する立場となりました。

実作をつくる場に立ち会うことでしかわからない建築の魅力やちからについて、少しでも次の世に伝えていきたいと思っています。そのために現実に向き合い、もがき、楽しんでいる姿を見せること、また学生たちと新しいことに向き合って、共に学びあっていければと考えています。こうした受賞をはじめ、本学の伝統をさらに次の世代にもつないでいかなければなりません。本学の建築学科のもっているちからは大きいと思います。こうした受賞も先輩方から受け継いできたものであり、本学の新しい建築を生み出していくちからを学科全体で共有し、様々な分野が協力しながら伝えていくことが必要だと考えています。これからいろいろな取り組みが必要になると思います。皆様方の建築学科への協力、応援を是非よろしく願います。



福島加津也 (FUKUSHIMA Katsuya)
東京都市大学専任講師／
福島加津也＋富永祥子建築設計事務所
1968 年神奈川県生まれ、1990 年 武蔵工業大学工学部建築学科卒業、1993 年 東京藝術大学大学院美術研究科修了、1994 年～ 2002 年 伊東豊雄建築設計事務所、2003 年～ 福島加津也＋富永祥子建築設計事務所、現在 東京都市大学工学部建築学科講師

福島加津也 (H02 卒) 東京都市大学専任講師

「木の構造 工学院大学弓道場・ボクシング場」

この度、当建築にて 2015 年度日本建築学会賞の作品賞を受賞いたしました。学会賞は日本建築界で最も栄誉ある賞の一つであり、私のように事務所が小さく作品数も少ない建築家にとって、大変光栄なことと思っています。また、これまでの学会賞受賞作品の中では、最も小さく（平屋で約 100㎡）、最もシンプルで（ワンルームでトイレもない）、最もローコスト（屋根架構以外何もない）といえるでしょう。これは工学院大学の運動部のための二つの建築です。八王子にある緑豊かなキャンパスのグラウンドに 150m ほど離れて建っています。弓道の「静」とボクシングの「動」というイメージは対比的ですが、「武道」と「格闘技」には緊張感という共通するテーマもあります。

木でつくるということは、環境的な社会貢献を目指す大学からの要望でした。このため、設計の力点は 7.2m × 10.8m の古建築のお堂のような無柱空間を、いかに木造でつくるかに置かれました。ここでは、民家の小屋組や寺社の組物を参照し、貫と束による繊細な格子フレームと、三手先を室内に反転した力強い天秤フレームをていねいにオーバーホールし、現代に再利用しています。共に日本の伝統木造の特徴である水平と垂直の架構であり、接合部の多さによって全体の冗長性を保つという現代性を併せ持っています。この二つの架構はビス留め、ボルト締めのような誰にでもできる日常の技術と、パネのような半剛接合という実証実験による最新技術によってできています。それは、日曜大工のブリコラージュと科学者のエンジニア

リングの一体化であり、たった今組み立てられたかのような空間の新鮮さを生み出します。このように、技術の開発と作品の表現を同時に行なうことは、つくることの永遠化といえるでしょう。伝統に根ざしながら革新的な試みで完成した二つの空間は、とても簡素なものでありながら、考えつくされた技術と木材という歴史的素材でつくられているために、その架構に包まれて立つ人の心を揺さぶるでしょう。私の建築の根底には歴史と技術への好奇心があります。このほとんど掘り立て小屋といつてよい建築が学会賞を受賞したことが、若く無名で貧しい建築家や、建築を学んでいる学生たちの幾許かの励ましになればとても嬉しいです。

「工学院大学 弓道場・ボクシング場」

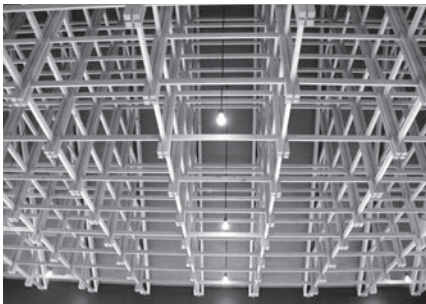
第 17 回 如学会作品見学会

2015. 8. 22 [土]

設計：福島加津也 (H02 卒)
福島加津也＋富永祥子建築設計事務所
文：鈴木亨 (S46 卒)
鈴木工務店



弓道場



弓道場



ボクシング場



ボクシング場

工学院大学八王子キャンパスに完成した、簡素で小さな建築二棟の見学会へ出かけました。丘陵地帯に立つ、このキャンパスに校舎は等高線に沿って雛段のように配置され、変化をつけています。正門から入ると少々きつい坂を上らなくてはなりませんでした。少し上ると右手の方に建築家武藤章氏設計の図書館が表れてきます。この建物は解体もきまり、移転準備中で内部の見学が出来ませんでした。この建物の存続が議論されたようです。建築学科のある大学だからこそ残してほしい感じがします。出会った仲間と見学が出来ず残念がりました。当日は夏休みのオープンキャンパスで大勢の親子連れでにぎわっていました。子供たちに建築を体感してもらい、建築に興味を持ってもらういい機会だったのではと思います。今回の見学建物「工学院大学弓道場、ボクシング場」は、キャンパスを登りきった緑豊かな場所にあり、二棟はグラウンドを挟んで、150m ほど離れて建っています。同時に二つの建物を視野に収めることができます。簡素で小さい二棟の建築は、元ボクシング場の敷地にまず弓道場を造り、弓道場のあった場所にボクシング場を建設したそうです。二つの施設は同時に計画し木構造で建設されていることが特徴の一つです。

この建築は、今年度の日本建築学会作品賞を受賞した作品ですが、見学前にはこの規模で受賞ができるのかと、不思議に思っていたのでした。設計者、本学建築学科専任講師・福島加津也氏 (H02 卒・福島加津也＋富永洋子建築設計事務所) で、福島氏の解説付きで案内をしていただきました。裏話も含め穏やかなうちにも氏の心の熱さを感じました。大学の運動部のための二つの建築は、弓道の「静」とボク

シングの「動」と対照的なスポーツをどう表現するかにあったようです。大学からは、環境的な社会貢献と、ローコストであることが要望として出されたそうです。前者は、木造であること、そして 7.2m × 10.8m (4 間 6 間) をコアにしたシンプル平面と仕上げ材でコストを抑えたそうです。屋根架構部材に違いを持たせて「静」と「動」が表現されています。4 間 6 間はともに無柱空間で、設計の力点はいかに木でつくるかに置かれ、「静」の弓道場は民家の小屋組み、例えば、伊豆韭山にある「反射炉」を造った江川太郎左衛門の豪邸の小屋組みを、繊細な部材と技術で再構成した格子フレームが用いられています。ボクシング場は寺社の組物からアイディアを得て軒先を支える三手先を室内に反転させた天秤フレームとして再利用しています。共に水平と垂直が特徴な日本の伝統木架構ですが、架構にはビス留め、ボルト締めを多用し木材の変形を考慮して寒冷地仕様のパネのような半剛接合という最新技術も採用したそうです。木材は、小径木や食害材を適材適所に選ぶためにも設計初期の段階から施工者や木材業者と密に情報交換することで、さまざまな可能性が広がっていったそうです。福島氏は、同じ規模の建築を同時に設計し、その違いを表現する面白さを語り、また、建物は選手が入って初めて生き生きすると話されていました。弓道場の練習風景は緊張感の中で選手と建築が一体となる瞬間を実感させられました。当日は猛暑の中、噴き出す汗を気にともせず皆さん熱心に話に耳を傾けていました。木造住宅の設計施工に励んでいる者にとっては、常日頃、木造の氣になる点や建設方法など参考になりましたし、刺激を受けた見学会でした。ありがとうございました。

大林組技術研究所

外に開かれた技術プレゼンテーション施設

2015.06.26

舟岡 努（S52卒／舟岡技術士事務所）

参加者：宮崎 英典 (S63)、水越 一晃 (H25)、櫻井 旬子、武井 彩野、櫻井 ちると、香月 亮一、中川 吉永 (S38)、青柳 浩男 (S40)
岡野 正人 (S46)、鈴木 亨 (S46)、山岡 嘉彌 (S46)、丹羽 譲治 (S48)、酒井 孝博 (S51)、池谷 透 (S51)、舟岡 努 (S52)
芝本 敏彦 (S59)、山田 浩嗣 (H5)、古屋 歴 (H11)、宇野 充 (H16)、菅野 洸太 (M2)、廣武 諒 (M2)、藤村 直輝 (M2)
滝口 祥平 (M1)、岡田 航太 (B4)、熊井 政充 (B4)、田中 匠 (B4)、菱沼 乾 (B4)（敬称略）

第4回となる技術見学会は25名の参加を得て、東京都清瀬市の郊外にある大林組技術研究所を訪ねた。本研究所は最新の研究設備を備えるとともに、近年注目度の高い環境、スマート化を実践しており、2010年に竣工した本館テクノステーションをはじめとした建築物は、建築画報社で特集が組まれ紹介されるなど、多くの建築専門誌*1にも紹介された、注目度の高い施設である。「技術のプレゼンテーション」がコンセプトの一つにかかげられており、訪れ、見る者に技術を感じさせる工夫が随所に盛り込まれていた。

■ 環境配慮技術の実践ー本館テクノステーション
本館は、CASBEES 評価（環境性能効率（BEE）＝7.6）を取得している。最高ランクの環境配慮型建築を体験できる絶好の機会となった。研究者の執務空間である本館は、環境配慮技術を試行できる絶好の機会であったと推察される。近年の環境配慮型技術は、省エネと快適性のトレードオフ関係を最適に設計する必要があり、難易度は高い。独自の研究環境計画を基に、花粉センサー、クールシャワー、自然採光、パーソナル放射空調、IC タグスイッチなどの環境配慮技術を駆使している。

天気がよいと、ほとんど照明を使うことはないとのこと。また、曇り、雨天の場合でも、西日除けのルーバー下に設けられた LED 照明で補助するだけとのことであった。空調は個別に管理されており、IC タグで入室が確認された時点で、デスク廻りの個別空調が運転される。人が持ち込む熱を抑制するために、入館前に人体の温度を下げるクールシャワーや人のあまり近づかないエリアにエアバリアを設け、空調温度の設定を緩和するなど、徹底した運用となっている。

■ 先端構造技術ー本館テクノステーション
構造技術も実用されている。執務空間上にある2階の2本のブリッジには、スリムクリート（スチールファイバー入りモルタル）と制震装置が使われており、執務空間の解放感に配

慮したスマートな構造をつくりだしている。制振装置は2本のブリッジで異なる構造（アクティブ制震とパッシブ制震）のものが使われており、見学者も通ることができるブリッジで、実際に制振装置の動きを見ながら効果と差を体感できる。

執務空間にある柱は、耐火塗料が施された高強度 CFT により、18m スパンでφ500mm というスリムなものである。地下には、油圧アクチュエーター4基による免震装置が設置されている。ラピュタ2 D（スーパーアクティブ制震装置）と呼ばれるシステムは、地震による入力をセンシングし、オートプログラムにより制御力をアクチュエーターに指令をだす。その結果、地震による揺れが打ち消される。3.11 の地震においては、建物と周辺地盤の間に設けられたエキスパンションジョイントも想定通りの動きを示したことが確認されている。

■ みせる実験設備ーオープンラボ2
建物に実用されている新技術（ブレーキダンパーなど）が見えるように工夫されている。試験装置（多目的人工気象再現室など）も入館者からの視線が確保されている。

■ 技術のプレゼンテーション
振動体験装置を体験することができた。この装置は、ラピュタ2Dの個別部屋設置タイプを備えており、アクティブ制振装置の効果がプレゼンできる。体験者は、実際の大地震の揺れ、長周期地震、免震機構が設置された建物のゆれ、超高層の風揺れ、などが体験できる。保守的で、閉鎖的になりがちな研究施設を思いっきり外に開いた感じは新鮮で、また、プレゼンテーションにも工夫が随所に見られ、技術知識の獲得とともに、楽しい時間を過ごさせていただいた。

建築専門誌*1

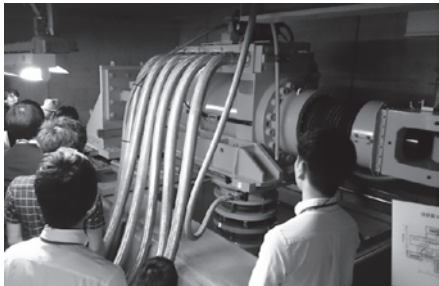
1. 建築画報 No3612015.2(建築画報社)
2. 作品選集 2013(日本建築学会)
3. ディテール 199/2014.1 月号 (彰国社)



本館外観



マイクロバインド発電



ラピュタ2D



オープンラボ2



振動体験

旧岩崎邸・東大キャンパス見学会

明治建築と現代建築を巡って

2015.05.19

幸村 憲衛（S40卒／NPO建築・街づくり支援センター専務理事）

参加者：畑 和男 (S31)、広田 幸子 (S37)、阿部 寧 (S38)、小澤 紀 (S39)、幸村 憲衛 (S40)、佐藤 光司 (S38 通信)
岡野 正人 (S46)、小川 貞和 (S46)、丹羽 譲治 (S48)、木村年男、松本裕、高橋考（敬称略）

世界遺産への登録で「明治日本の産業革命遺産」が話題になっているなか、旧岩崎邸（明治時代の建物）と東大本郷キャンパスを巡る見学会を企画した。建築・街づくり支援センター主催の見学会（12回目）、旧岩崎邸庭園を見ることを主に JR 東日本御徒町駅に参加者12名が参集した。

最初の旧岩崎邸庭園に辿り着き、構内の正門から受付まで、なだらかな砂利道になっている。道沿いの高い木立の中を歩いたが、気分爽快で都心とは思えないこの環境は貴重な財産と認識し重要文化財に指定され大切に保存されているのは喜ばしい。

土佐藩の地下浪人から身を起こした政商・岩崎彌太郎の功績が明治政府から高く評価され、3 庭園（六義園・旧岩崎邸庭園・清澄庭園）を一括で手に入れたようであるが、明治時代の出来事とはいえ、大変な権力を獲得したものと驚かされた。3 庭園の一つに旧岩崎邸が建てられた。明治 29 (1896) 年に三菱三代目・彌太郎の長男久彌の本邸である。屋敷を手にした彌太郎であったが、住居には住まなかったようだ。今回の見学会、最も興味を持ったのが、彌太郎の生き様を改めて知ったことで、二代目を彌太郎の弟彌之助、三代目を長男の久彌、四代目は小彌太、すなわち彌太郎の甥に引継ぎ、親から直接息子に引継いでいない。これで、三菱財閥構築を揺るぎないものにしたと思う。NHK 大河ドラマ「龍馬伝」(2010 年) 彌太郎の視点で龍馬を語っていた。明治維新の立役者「龍馬」をライバルに見立て、海運から産業振興（軍艦島もその一部）に繋がり、実業家として成長していった功績を再認識できたことが嬉しかった。

さて、庭園内には3棟の建物（洋館、撞球室、和館）が現存している。その内、洋館と別棟の撞球室（ビリヤード場）は、ジョサイア・コンドル（現・東京大学工学部建築学科・東京帝国大学名誉教授：辰野金吾等の恩師）の設計によるもので、国の重要文化財に指定されている。当日の参加者は、一団で女性のボランティアの説明を聞きながら見学した。そ

の説明の中から、最も驚いたのが「洋館」と「撞球室」を地下道で結んでいたことだ。雨に濡れずに撞球室へ移れる発想は、時代が明治なので、外国人・ジョサイア・コンドルからできたと思う。撞球室の構造は木造で、お洒落で合理的な山形トラスで空間を構築し、和館との違いを見せている。「洋館」と「撞球室」の2棟は岩崎家の迎賓館として位置付け、毎夜、外国人や賓客を歓迎していたのだろう。

日本の伝統工芸品「金唐革紙」は、高級壁紙として利用し、洋館2階の客室、撞球室への地下道内部の壁紙として使用している。「金唐革紙」とは、和紙に金属箔を張り、版木に当てて凹凸文様をうちだして彩色した壁紙である。その他、床には寄木細工を施した床面がある。その寄木は無垢材を使用しており、現在でも寸分狂いが出していない。1階のペランダには、英国ミントン製のタイルが目地なしで敷き詰められている。

洋館1階のサンルームは増築したもので日本人の設計である。引違い窓は日本独特で、外周の窓に採用され明るい空間を醸し出している。西洋タイプのドア突き出しと引違との違いが分かる。これらのことから、コンドルは、日本の建築技術とか職人の技量について、どう感じていただろうか？と興味を持たせてくれた。日本人妻を娶り、日本で永眠したことは日本に好意を寄せてくれた証しだろう。（公益財団・東京都公園協会発行 旧岩崎邸公園パンフレット参照）

旧岩崎邸から東大本郷キャンパスまでは、歩いて4、5 分の距離と近かった。校内は、緑の木々が生い茂り、広大な敷地に圧倒された。このキャンパス内に最近建てられたダイワユビキタスコンピューティング研究所（隈研吾設計）と情報学環福武ホール（安藤忠雄設計）の2棟を見学した。それぞれ設計者の特異性を出した建物が構築されていた。

NPO 建築・街づくり支援センターでは、話題になっている街、建物や歴史的建造物等の見学会を年2回開催しています。ご希望の見学箇所があればご一報ください。



旧岩崎邸



撞球室



旧岩崎庭園にて



ダイワユビキタスコンピューティング研究所



情報学環福武ホール

如学会主催「進路支援プログラム 2015」 本年も多数の企業、学生参加予定

- 実施日時： 2015 年 11 月 25 日〔水〕13:00-19:00
- 場所： 東京都市大学世田谷キャンパス
- 開催の主旨： この企画は「就活に当りOB・OGと学生の皆さんとが本音で語り合う“コミュニケーション”の場」であり「学生個々人と大学・OB・OGとの繋がりを大切にしてきた本学の精神の表現の場」でもあります。就職を希望する学生の皆さんが、様々な分野に進まれ活躍するOB・OGの方々と直接本音の話ができる場として、昨年に引き続き開催することと致しました。学生の皆さんにとって「幅広い建築の実業社会を知る絶好の機会」であり、また「一人では不安な就職問題について大学・OB・OGが親身になって相談に乗ってくれる場」でもあります。是非積極的に参加してください。
※学生の方は平服でご参加ください。いわゆる「リクルートルック」である必要はありません。

□実施プログラム

第 1 部

業種別仕事紹介 13:00-15:45 建築学科 1 階グランドギャラリー
建築関連業界を代表する 14 の企業のOB・OGの講師の方々から企業・活動の概略につきパワーポイントを用いてお話しいたします。

	〔業種名〕	〔企業名〕	〔担当者（卒業年）〕
1	アトリエ設計事務所	新居千秋都市建築設計	新居末陸 (H12)
2	構造設計&総合エンジニアリング	造研設計	三好敏晴 (H10)
3	組織設計事務所	安井建築設計事務所	村松弘治 (S57)
4	総合建設会社（企画開発・設計）	大成建設	鈴木裕美 (S56)
5	総合建設会社（施工）	鉄建建設	北野一彦 (S54)
6	環境・設備関連	大気社	飯川公貴 (S60)
7	ハウスメーカー	大和ハウス工業	柳生直彦 (H04)
8	インテリア・家具・空間設計	イトーキ	松島咲季子 (H21)
9	技術・材料関連	旭ビルウォール	倉斗道夫 (S42)
10	官公庁 等	台東区	伴宣久 (S56)
11	鉄道・不動産・ディベロッパー関連	森ビル	吉松晃士 (S59)
12	エネルギー・情報関連	東京電力	佐野仁美 (H06)
13	ディスプレイ	調整中	講師調整中
14	海外留学・海外就職	UCLA	十河彰 (H16)

第 2 部

企業別仕事紹介 16:00-17:30
参加企業別に 72 のテーブルを準備、関心のある企業のOB・OGの方々から直接生の情報を得られる貴重な場を提供します。

(五十音順)

官公庁 等	荒川区、川崎市、京都府、台東区、横浜市、UR 都市機構
アトリエ設計事務所	ディー・サイン、長谷川順持建築デザインオフィス、三上建築事務所
構造設計事務所	造研設計、Arup
組織設計事務所	アルモ設計、石本建築事務所、NTT ファシリティーズ、観光企画設計社、久米設計、坂倉建築研究所、千代田テクノエース、東急設計コンサルタント、日建設計、日本設計、松田平田設計、三菱地所設計、山下設計
総合建設会社	安藤ハザマ、大林組、大本組、鹿島建設、五洋建設、佐藤工業、清水建設、西武建設、生和コーポレーション、銭高組、大成建設、大和小田急建設、高松建設、竹中工務店、鉄建建設、東急建設、戸田建設、飛鳥建設、巴コーポレーション、西松建設、長谷工コーポレーション、藤木工務店、フジタ、三井住友建設、若築建設
環境・設備関連	新菱冷熱工業、高砂熱学工業、西原衛生工業所
ハウスメーカー	住友林業ホームテック、積水ハウス、大和ハウス工業、東急ホームズ、長谷川萬治商店
インテリア・家具	イトーキ、イリア、丹青社、三越伊勢丹プロパティデザイン
技術・材料関連	旭硝子、旭ビルウォール、ノザワ、LIXIL
不動産・ディベロッパー関連	鈴与三和建物、住友不動産、ナイス、三菱地所レジデンス、森ビル、
エネルギー・情報関連	東京ガス、東京電力、トランスコスモス、NTT-DATA
ディスプレイ	丹青社
海外留学・海外就職	新居末陸、桑原茂、杉本拓海、十河彰

第 3 部

懇親会 17：30-19：00
立食形式の懇親会で、第 2 部で交流できなかったOB・OGとも更にフランクな形で質疑応答・コミュニケーションの機会を創りだします。

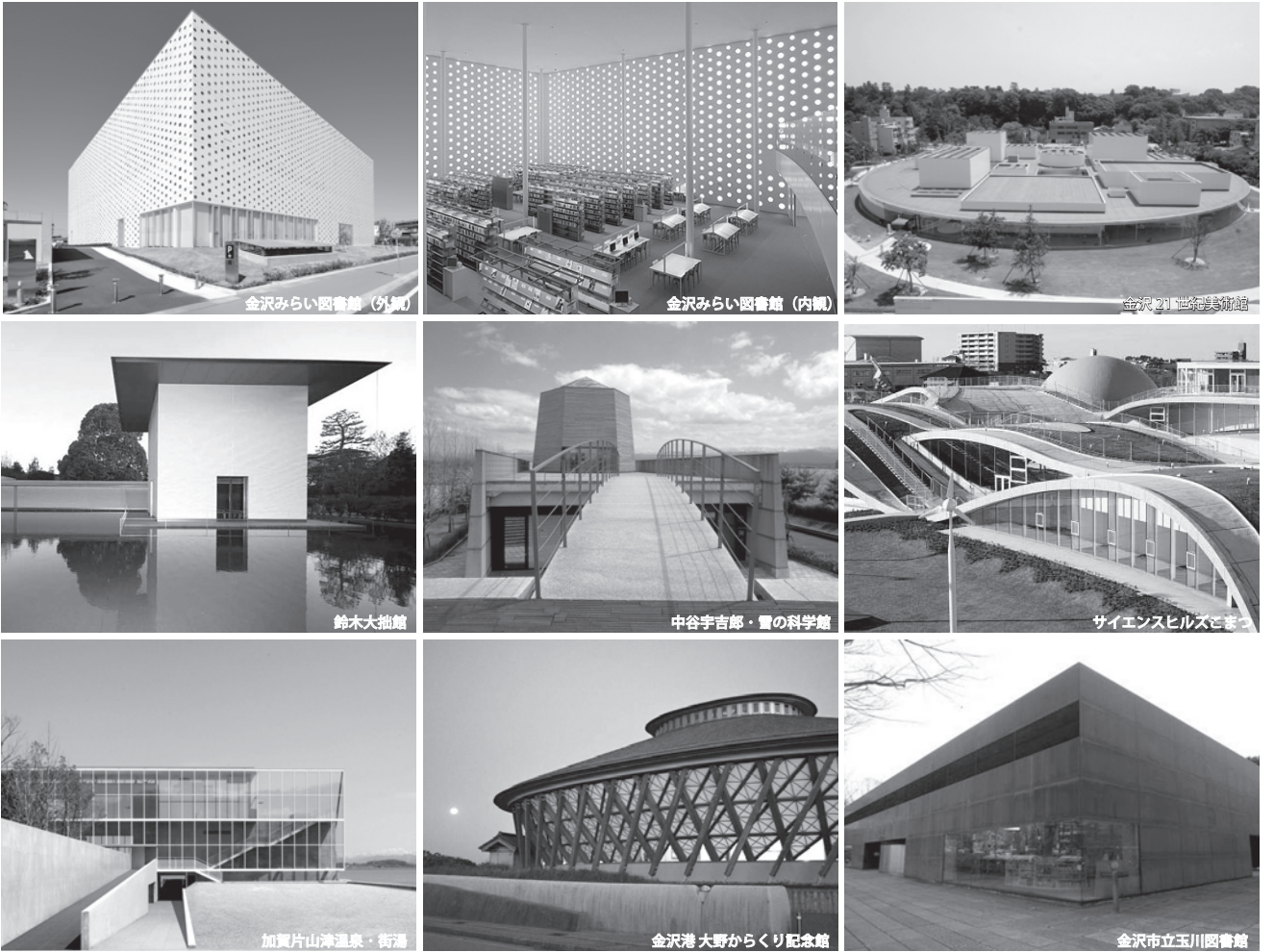
2015 年 3 月 14 日北陸新幹線〔東京－金澤〕開通記念！超特急「かがやき」に乗車「金澤の最新建築と古都の風情と食の文化を訪ねる旅」を敢行しました。

「金沢最新建築視察ツアー」開催

主催：如学会
共催：校友会、校友会北陸支部、柏三水会

2015 年 3 月 14 日〔土〕-15 日〔日〕1 泊 2 日

堀場弘氏（S58 卒・東京都市大学教授、シーラカンズ K&H）設計による最新の話題作「金沢海みらい図書館」（日本建築家協会賞、BSC 賞など）、磯崎新、谷口吉生、SANAA らの設計した話題の新建築群や古都の茶屋街など貸切バスで巡り、由緒ある老舗料亭で加賀懷石料理や河畔の料亭で北陸の新鮮な魚介類を食する、金沢独自の文化と食を堪能する旅を満喫しました。更には、校友会、柏三水会の方々の参加を得て、校友会北陸支部の同窓の方々 9 名と合流し、計 50 名の盛大な懇親会が開催されました。詳しくは次ページの露木博視氏（S55 卒）のレポートをご拝読下さい。



ツアー参加者					
講師					
堀場 弘	S58（建築）	東京都市大学教授／シーラカンズK&H	高川 順正	S54（建築）	金沢設計
五島育英会			青木 圭介	S60（土木）	アルスコンサルタンツ
渡辺 透	S46（建築）	五島育英会	相馬 宏昭	S63（機械）	三谷産業
建築学科			宮坂 智信	H09（建築）	宮坂建築設計事務所
勝又 英明	S55（建築）	東京都市大学建築学科主任教授	藤部 竜太	H11（建築）	浦建築研究所
天野 克也	学外	東京都市大学教授	野村 昌弘	H15（経営）	総合資格学院
校友会・柏三水会					
有馬 禎男	S37（土木）	有馬測量事務所	如学会		
関 博	S38（生機）	新星冷蔵工業	木幡 裕充	S32（建築）	元・東京カーテンウォール
鈴木 威一	S41（通信）	エグゼック	大森 康幹	S33（建築）	大森建築事務所
辻 修	S41（通信）	エル電機製作所	阿部 寧	S38（建築）	階段システム研究所
山田 貴久	S44（機械）	エコプラン	小辻 武	S43（建築）	小辻建築計画研究所
石田 弥	S45（電気）	利恵産業	吉田 勝	S43（建築）	PAO設計
校友会・北陸支部					
高屋 利行	S52（建築）	高屋設計環境デザインルーム	牛尾 昌弘	S45（建築）	エイアールシステム設計室
堀 誠	S53（建築）	高屋設計環境デザインルーム	鈴木 亨	S46（建築）	鈴木工務店
永島 剛士	S53（経営）	永島製作所	山岡 嘉彌	S46（建築）	山岡嘉彌デザイン事務所
			市川 恒恵	S48（建築）	エス アンド エヌ
			中澤 昭伸	S48（建築）	織本構造設計
			日笠 晴夫	S48（建築）	日笠商事
			古橋 昭男	S49（建築）	古橋建築企画研究所
			酒井 孝博	S51（建築）	日本設計
			露木 博視	S55（建築）	オフィス露木
			弓削 昌義	S57（建築）	森ビル
			長谷川 順持	S61（建築）	長谷川順持デザインオフィス
			新井 章邦	S63（建築）	森ビル
			大角 幸生	H08（建築）	鹿島建設
			三好 敏晴	H10（建築）	造研設計
			学外		
			木田 三保	学外	ルヴァン美術館
			下永 恵	学外	坂倉建築研究所
			長谷川 利恵	学外	長谷川順持氏夫人
			古橋 京子	学外	古橋昭男氏夫人
			下斗米 早苗	学外	石田弥氏親類

はじめに

今回の「金沢最新建築視察ツアー」は、昨年8月の山岡会長の『北陸新幹線の開業日列車で金沢の建築を見に行く』という掛け声から始まり、半年かけてのプロジェクトです。その間、手に入りにくい新幹線開業日の切符の手配など会長はだいぶ苦労されたと思います。加えて厚み2cmのツアーテキストは圧巻です。ツアー行程は、2日間で見学地14箇所を廻るというかなり強行軍ですが、金沢に着いてからは、全てガイドさん付きの大型バスでの移動で、疲れずに済みました。この遣い合いに感謝です。ツアーの参加メンバーは、如学会27名（内北陸支部2名、校友会6名、学外5名の総勢38名の大所帯となりました。初めてお会いする方、如学会理事会でお世話になっている先輩方の他に、卒業後35年ぶりの再会となったデ研（デザイン研究会）の後輩も参加し、メンバー構成の面からも楽しいツアーとなりました。

ツアーの全見学先・訪問先を順を追って記します。

3月14日（土）

1ー① 東京駅

東京駅は北陸新幹線開業日とあって、乗客、報道陣、駅員、加えて、鉄ちゃん、でごった返し、駅全体がお祭り騒ぎでした。その人ごみの中、「8時36分発かがやき505号」（北陸新幹線東京発2番列車）に奇跡的にも参加者全員無事乗車、金沢に向けて出発しました。

1ー② 金沢駅

11時10分到着。金沢駅でも、記念品を配る人、報道陣、芸能人等々、大歓迎ムードで東京駅以上の喧騒状態でした。人がごった返している中、ふと見上げると、新幹線ホームの柱上部に加賀百万石をアビールした金箔の装飾が目にとまりました。

1ー③ 金沢城公園

金沢駅で地元の方々と合流し、視察の開始です。まずはバスで、金沢城公園に移動し、公園内を様々な石積み の解説を読みながら、玉泉院丸庭園を散策し、昼食処の加賀懐石料理「三芳庵」に到着。

1ー④ 三芳庵

如学会研修交流ツアー（共催・校友会、校友会北陸支部、柏三水会）

金澤の最新建築と古都の風情と食の文化を訪ねる旅

北陸新幹線「東京―金澤」開通記念！

超特急「かがやき」で行く「金沢最新建築視察ツアー」

文●露木博視（S55卒）

盛大に開かれました。北陸支部の方々ととは初面識にも係らず、皆さん積極的に杯を交わしていただき、当地での仕事の話など、お食事とお酒の美味しさも手伝って宴は大盛況となりました。 続いて二次会は、長老組と若手組に別れ、若手組は金沢在住の藤部氏（H11卒）の先導で、主計町（かぞえまち）のやはり浅野川沿いにあるお店「SAKE BAR 数KANOE」に入りました。藤部氏が所属する浦建築研究所で実質的に設計された、既存の町屋をリノベした建物です。北陸新幹線開通日にも係らずと2階貸切りにしていただき、ゆっくり飲みことができ、更けてゆく夜を日本酒と歓談で存分に楽しみました。藤部氏に感謝です。

1ー⑩ 宿泊

ホテルは二手に分されました。

・「マイステイズ金沢」…30㎡以上あるシングル個室

・「ホテル金沢」…こちらもツインルームをシングルコース

どちらもゆつたりと豪華な気分です寝ることが出来ました。

3月15日（日）

2ー① 金沢海みらい図書館（設計…堀場弘（S58卒／東京都市大学教授）＋工藤和美／シーラカンSK&H）

二日目は、ツアーのメイン企画の「金沢海みらい図書館」からスタートです。図書館は、周りに何も無いためか、3階建てながらもとと大きな印象をうけ、特徴でもある沢山の丸窓が目立ちます。堀場先生の計らいで、開館前から入れさせていだだいたため、館内を利用者に遠慮することなく自由に見学することが出来ました。加えて、堀場先生自ら、ガラスブロックと構造体の関係や空調システムなど細かいところまで解説していただき、更には地下設備機械室までも案内していただき、この建物のシステムのな美までも理解することが出来ました。建物内部は、無数のガラス窓から日光があわく差し込み、高い天井、細い柱により開放感が半端なくありました。

開館後は、館内会議室で、職員の方から金沢行政の図書館設計、運営等に対する熱い想いを込めた説明を受けました。さすがBBC「世界の素晴らしい公立図書館4館（世界のスーパーライブラリー）」にも選ばれた図書館です。

2ー② 金沢港大野からくり記念館（設計…内井昭蔵）

内井昭蔵氏のデザインらしく、曲線、円をイメージさせるメルヘンチックな建築です。不思議と素直に童心になれる空間でした。

2ー③ ヤマト醤油味噌工場

金沢大野町は、日本海に面する加賀藩の外港です。今も当時の建物（百年蔵）が残っている、木板外壁が続くちよっとレトロな工場街でした。

2ー④ 発酵食美人食堂

昼食は、ヤマト醤油敷地内にある、発酵食美人食堂、でいただきました。最初に当主より、ヤマト醤油は、2代目が醤油醸造を創め、3代目が味噌醸造を創め、現在の4代目が味噌&醤油を使った発酵食調味料の製造をはじめたと説明

「三芳庵」は、兼六公園瓢池湖畔にある明治8年創業の老舗で、かつて皇族ら要人が利用されたことで有名なそうです。内部は、お茶屋を髣髴させる朱塗りの壁でそこに鷹のかけ軸が掛かっていました。料理は、海老、つぶ貝、竹包みの魅まんじゅうなど、海と山に恵まれた食材豊富な加賀料理でした

1ー⑤ 金沢21世紀美術館（設計…SANA A）

美術館では、「レランドロのブル」をはじめ各自思い思いの見学となりました。催しとして、開館10周年記念特別展「ジャパン・アーキテクト100」が開催されていて、手塚貴晴（S62卒）＋手塚由比（H04卒、石上純也（H09卒）の各氏が、また、「3. 11以降の建築」展では、新居千秋（S46卒）、羽鳥達也（H08卒）の各氏が出展されていました。（敬称略）同窓として誇らしく思いました。

1ー⑥ 鈴木大拙館（設計…谷口吉生）

鈴木大拙館は美術館から10分ほど歩いたところにあります。館は、金沢が生んだ仏教哲学者・鈴木大拙（1897-1990）の考えや足跡を伝えるとともに、来館者自身が思索体験できる空間が提供されています。水鏡の庭に浮かぶ個性的な建物の中に座ると、外界と隔たれた、独特な空気を感しました。

1ー⑦ 金沢市立玉川図書館（設計…谷口吉郎、谷口吉生）

谷口吉郎・吉生父子の共同作品です。旧専売公社金沢工場の建物と現代建築を融合させてあります。図書館稼働中のため、全員建築的な批評もせず、おとなし見学となりました。

1ー⑧ ひがし茶屋街

お待ちかねのテレビCMにもよく使われている茶屋街です。現在でも、全体が保存区域になっているため、文政の加賀藩時代からの情緒が残る町並みが続いています。夜ともなればどこからか三味線や太鼓の音が聞こえてきそうな町に色気が漂っていました

1ー⑨ 割烹「魚常」

茶屋街からそのまま浅野川河畔に向かつて歩き、夕食会場の割烹「魚常」に着きました。浅野川に架かる『梅の橋』すぐ近く、「鏡花のみち」に面した処です。ここで、校友会北陸支部の同窓生（9名）と合流し、約50名による懇親会が

がありました。一皿に9種類の発酵食（ラタトイユ、大根すし、三種豆の煮豆、蓮根の天ぷら泡醤油添え、人参サラダ、五郎島金時ごぼう味噌揚げ、わかめのしやぶしやぶ、牛ヒレステーキ和風ソース、メイクインときのこの醤油糀炒め）、それと数日間熟成させたもつちもちの寝かせ玄米とお味噌汁。献立の種類は多かったが、一品の量が物足りなかった。

2ー⑤ サイエンスヒルズこまつ（設計…UAO・伊藤麻理）

言わずと知れたJR小松駅前にある大型施設です。四つのウェーブが、敷地全体を覆い被さるように不規則に配置されている。そのウェーブ上には歩行可能な屋上緑化が施されていて、屋上には上がることを意識することなく、自由にそこを登り降りすることができた。したがって子供たちは大喜びで、屋上を自由に走り回っていました。建物内部は、理科・科学大好き少年少女のための展示トラクションがあり、結構面白い内容でした。

2ー⑥ 中谷宇吉郎雪の科学館（設計…磯崎新）

木で出来た六角の塔が立ち並ぶユニークな建物で、橋を渡り2階部分からアプローチするのが斬新。柴山潟に面しており、遠く白山を望む眺望も素晴らしい。案内書によると、雪の結晶や人工雪などの分野で世界的な研究を成し遂げた、石川県加賀市出身の物理学者・中谷宇吉郎を顕彰する目的で建てられたそうで、雪を作る事が体験できました。皆さん作った雪の結晶を大事にされていてかわいかったです。

2ー⑦ 加賀片山津温泉総湯（設計…谷口吉生）

最後の見学地は、旅の疲れを取る意味も込めて温泉場です。浴室は、「湯の湯」と「森の湯」があり毎日、男女が入れ替わるそうです。当日は男性は「森の湯」で、草・木しか見えませんでした。パンフレットによると「湯の湯」の窓からは、『前面に広がる柴山潟の水面と浴槽の水が連続し、あたかも湯に浸っているような幻想的な感覚を楽しめます』だそうです。相当残念です！

2ー⑧ 金沢駅

19時39分発北陸新幹線かがやき516号で帰京。夕食は、金沢駅で希望の駅弁が支給されました。

おわりに

天候にも恵まれたこともあり、半年経った今でも思い出出すことができる、ツアータイトル通りの金沢の建築と風情と食べ物を知ることができた視察旅行でした。それにしても2日間で驚いたのは先輩方の元気なこと！よく歩いてよく食べて、よく飲んでいました。敬服です。

最後に、2日間私たちにお付き合いただいた地元金沢の高屋氏（S52卒）と藤部氏（H11卒）には大変お世話になりました。全見学地をタフに廻れたのもお二人のお陰です。ちなみに、藤部氏が本人からお聞きしたのですが、蔵田先生と藤部氏は同じ誕生日（2/26）で、生誕100周年（1966）に武蔵工大に入学され……。今度東京にいらした時に飲みながらいろいろとお話を聞かせてください。



2ー⑥中谷宇吉郎雪の科学館



2ー④発酵食美人食堂



2ー②金沢港大野からくり記念館



2ー①金沢海みらい図書館



2ー①金沢海みらい図書館



1ー⑨割烹「魚常」



1ー⑦ひがし茶屋街



1ー⑥鈴木大拙館



1ー⑥鈴木大拙館



1ー④三芳庵



1ー②金沢駅



1ー①東京駅ホーム掲示板



2ー⑦加賀片山津温泉湯



2ー⑤サイエンスヒルズこまつ



2ー③ヤマト醤油味噌工場



2ー②金沢港大野からくり記念館



2ー①金沢海みらい図書館



2ー①金沢海みらい図書館



1ー⑥ひがし茶屋街



1ー⑦金沢市立玉川図書館



1ー⑥鈴木大拙館



1ー⑤金沢21世紀美術館



1ー③玉泉院丸庭園



1ー①東京新幹線かがやき50号

東京都市大学 建築学科 2015 年度 特別講義「建築の実務」

「第10回 如学会寄付講座」プログラム 2015.8.1[土]ー 8.6[木]

会場：世田谷キャンパス 1 号館 13L 教室、5 号館・小講堂

1 日目

August

1

Saturday

教室：1号館13L

1 時限 (9:30~11:00)



一級建築士事務所 すずき

鈴木宏亮氏 (H14 卒)

2002 武蔵工業大学卒業

2004 武蔵工業大学大学院修了

2004 手塚建築研究所勤務

ふじようちえん／茅ヶ崎シオン・キリスト教会切り妻の家／行灯の家／スチールシートハウス等を担当

2011 一級建築士事務所 すずき 設立

[テーマ]

アトリエ事務所で建築に携わること

2 時限 (11:15~12:45)



Arup 東京事務所

奥村祐介氏 (H19 卒)

2007 武蔵工業大学卒業

2009 武蔵工業大学大学院工学研究科建築学専攻修士課程修了

2009 アラップ東京事務所に入社

構造エンジニア

免震構造を得意とし、柏崎市文化会館アルフォーレ・大分県立美術館などで免震を用いた構造設計を担当。からきた昌蒲館・西能病院などにも従事

[テーマ]

建築とエンジニアリング

特別講師の皆様

ご多忙中にもかかわらず、ご講演内容の作成に多大な時間を割いてご準備をいただき、充実したご講演をいただき深く感謝を申し上げます。

2 日目

August

3

Monday

教室：1号館13L

1 時限 (13:00~14:10)



安井建築設計事務所

村松弘治氏 (S57 卒)

1982 武蔵工業大学工学部建築学科卒

1982-87 アトリエ・ドム

1987-88 西欧・東欧

1988 安井建築設計事務所 入所

設計部長、設計部総括などを経て常務執行役員 東京事務所

[テーマ]

クライアントが求める BIM

2 時限 (14:20~15:30)



新居千秋都市建築設計

新居未陸氏 (H12 卒)

2000 武蔵工業大学工学部建築学科卒

2002 UCL / The Bartlett School of Architecture M. Arch 取得

2002-05 USHIDA FINDLY ARCHITECTS UK (株) 新居千秋都市 建築設計 勤務

[テーマ]

dash up

3 時限 (15:40~16:50)



大林組

五十嵐 恵理子氏(H4卒)

1992 武蔵工業大学工学部建築学科卒

1992 株式会社大林組入社

建築本部 P D センター副課長

[テーマ]

大林組の BIM の取組み

4 時限 (16:50~17:30)

討論会

『デジタルテクノロジーと建築』

左記 3 名による討論会
司会：桑原茂 (H6 卒)

3 日目

August

4

Tuesday

教室：1号館13L
3時限のみ
5号館・小講堂

1 時限 (9:30~11:00)



東急ホームズ

伊瀬知 侑子氏 (H17 卒)

2005 武蔵工業大学工学部建築学科卒業 (株) 東急ホームズ入社

2005 注文住宅部門 設計部所属

[テーマ]

住宅設計の魅力

2 時限 (11:15~12:45)



AGC 硝子建材

島田 大氏 (H3 卒)

1991 武蔵工業大学工学部建築学科卒業

1991 不二サッシ株式会社入社

外装 アルミカーテンウォールの実施設計

2004 旭硝子ビル建材エンジニアリング株式会社入社 (現 AGC 硝子建材株式会社) リーダー

外装 ガラスカーテンウォールの実施設計

[テーマ]

日本の建設業界におけるガラスメーカーの役割について

3 時限 (13:45~15:15)



旭硝子

大島直文氏 (H7 卒)

1995 武蔵工業大学工学部建築学科卒

1997 武蔵工業大学大学院工学部研究科建築学専攻修了

1997 旭硝子 (株) 入社

1998-00 旭硝子 (株) 大阪支店勤務

2000-07 旭硝子 (株) 日本事業部勤務

2007-13 AGC グラスプロダクツ (株) 勤務

2013- 旭硝子 (株) ビルディングガラス部営業部チームリーダー

[テーマ]

まちに学校を作る

4 時限 (15:30~17:00)



日建設計

田辺裕美氏 (H17 卒)

2005 武蔵工業大学工学部建築学科卒業

2007 首都大学東京大学院修了

2007 日建設計入社 設計部

[テーマ]

まちに学校を作る

4 日目

August

5

Wednesday

教室：5号館・小講堂

1 時限 (9:30~11:00)



イトーキ

松島 咲季子氏(H21 卒)

2009 武蔵工業大学工学部建築学科卒業

2009-12 丸善株式会社

2012- 株式会社イトーキ

首都圏デザイン設計部配属

2015- イトーキ首都圏デザイン設計部

R&D 戦略企画部

教育・健康市場開発室兼任

[テーマ]

ワクワクする学びの場をつくる～楽しく働くための秘訣～

2 時限 (11:15~12:45)



久米設計

豊永正登氏 (S55 卒)

1980 武蔵工業大学工学部建築学科卒業

1982 武蔵工業大学大学院工学研究科建築学専攻

1982 株式会社久米設計 入社

2005 設計本部 ソリューション計画部 設計部長

2010 設計本部第一建築設計部 統括部長

2010 取締役執行役員 設計本部副本部長 兼 第一建築設計部統括部長

2011 久米新生設計諮詢 (上海) 有限公司 董事長

2012 取締役常務執行役員 設計本部副本部長 設計推進部統括部長

2013 取締役専務執行役員 設計本部副本部長

[テーマ]

総合組織設計事務所

3 時限 (13:45~15:15)



丹青社

中島 実氏 (S57 卒)

1982 武蔵工業大学工学部建築学科卒業

1982 株式会社丹青社入社

文化空間事業部事業部長

[テーマ]

博物館をつくること

4 時限 (15:30~17:00)



リアルゲイト

岩本 裕氏 (H8 卒)

1996 武蔵工業大学工学部建築学科卒業

1996-01 五洋建設株式会社

2001-04 株式会社大京

2004-09 株式会社リアルゲイト

2009 株式会社リアルゲイト設立 代表取締役

[テーマ]

建築プロデュースという仕事について

5 日目

August

6

Thursday

教室：1号館13L

1 時限 (9:30~11:00)



森ビル

吉松晃士氏 (S55 卒)

1980 武蔵工業大学 建築学科 研究補助員

1981 森ビル 株式会社 入社

1999 森トラスト株式会社 転籍

2005 森トラスト・アセットマネジメント (株) 出向

2007 森ビル株式会社 (再) 入社

2014- 森アーツセンター事務局

[テーマ]

東京を世界一の都市に、建築と変わりゆく不動産業界

2 時限 (11:15~12:45)



佐藤エネルギーリサーチ

小田桐 直子氏(H8 卒)

1996-03 (株) システック環境研究所

2005-10 オーガニックテンプル (株)

2010- 佐藤エネルギーリサーチ (株) 研究員

[テーマ]

環境コンサルティングの仕事

3 時限 (13:45~15:15)



イリア

北嶋亮介氏 (H22 卒)

2010 東京都市大学工学部建築学科卒業 (株) イリア 入社

2010 コンストラクション部所属

[テーマ]

社会に出るといこと

4 時限 (15:30~17:00)



大成建設

鈴木裕美氏 (S56 卒)

1981 武蔵工業大学工学部建築学科卒業

1981 大成建設 (株) 設計本部入社

設計本部・構造計画部部長

構造設計ひとすじ現在に至る

[テーマ]

最近の耐震・免震改修いろいろ

最終日 17:30 ~ 19:30 特別講義講師陣と受講生との懇親会／会場：1号館 4 階 ラウンジ『オーク』

最終日 17:30 ~ 19:30 特別講義講師陣と受講学生との懇親会／会場：1 号館 4 階 ラウンジ『オーク』

第 10 回 如学会寄付講座「特別講義 (1) 建築の実務」を終えて 特別講義委員長 桑原茂 (H6 卒)

この特別講義は学科教室と共に如学会が運営する単位の取得が出来る選択科目で、如学会会員が交代で講師となり、後輩へと『仕事の楽しさや厳しさ』を伝える異色の授業です。第9回目を迎える今年は18名の方が教壇にご登壇下さり、受講学年をこれまでの1年生から2年生に上げたことも手伝って、より熱気の籠った16コマの授業が8月1日から6日にかけて執り行われました。建築の勉強を始めて1年半、それぞれに興味を広げつつ将来に対する漠然とした不安を抱える2年生にとって、本講座はキャンパスライフの延長線上にどのような世界が広がっているのかを開示し、大きな目標と指針を与えています。感想レポートを見ると、多くの受講生が「建築の大きな広がりを感じ、とても面白かった」「様々な活躍の場を開拓してこられた先輩方が居られることを知って、勇気を頂いた」等と述べています。詳しい授業内容の説明はこの後に続く授業レポートに譲りますが「実社会で要求される能力・細分化される専門性・真摯に取り組むことの大事さ・困難な問題への対処法」といった生の声を学生は素直に受け止めていました。

卒業生が講師となり母校の現役学生に授業を行う取り組みは他校に類を見ない特別なプログラムだと思いますが、これまでご登壇を頂いた如学会会員は延べ140余名に

もなりました。会員の皆様にとっては「かつての学生時代を振り返りつつ母校への恩返しや気を引き締め直せる機会」として、学生にとっては「建築の勉強を通して様々な活躍の場があることを感じられたり、身近に頼もしい相談相手が出来たり」と、相互にとって大変意義深い時間となっています。就職難と言われる昨年、本講座を通して卒業生と現役学生の交流が生まれていることは、この閉鎖的な流れを打ち砕く大きな原動力になるでしょう。また、かつての受講生が講師になって帰ってくる事例も増えて参りました。今後このサイクルが加速されていくと、一層豊かな関係性を構築しながら真の産学連携とも言うべき存在に育っていくであろう、と手ごたえを感じずにはいられません。

そうした可能性を受けて、如学会では講師となって頂ける方を自薦・他薦を問わず広く募集しております。皆様からの応募をお待ちしておりますので、私・桑原まで (連絡先: info@swerve.jp) 何卒、宜しくお願い申し上げます。

最後になりますが、ご多忙中に資料作成等にお時間を割いて頂きました講師の方々、サポートを頂きました皆様、こうした素晴らしい機会を設けて頂きました学科教室へ、この場を借りて心より御礼を申し上げます。



特別講義



懇親会

第10回 如学会寄付講座「特別講義 建築の実務」講義レポート18人の特別講師による18のテーマの講義を紹介

8月1日(土) 担当委員：斉藤博

●1時限「アトリエ事務所で建築に携わること」

鈴木宏亮氏 (H14卒) 一級建築士事務所すずき

2004年武蔵工業大学大学院卒業後、手塚建築研究所にて活躍。ふじようちえん/茅ヶ崎シオン・キリスト教会切り妻の家等を担当。2011年「一級建築士事務所すずき」設立。手塚建築研究所にて協働した山村尚子さん(武蔵野美術大学建築科卒)と公私共のパートナーとなる。今回の講義は2年生にもわかりやすく「建築設計がどのように始まり進んでいくかを自らの設計プロセスに沿って説明、その中で“どこにこだわってきたか”を具体的に示し」学生たちの興味を喚起する講座となった。鈴木・山村両氏が特にこだわってきたのは①「スタンディー用の模型を“フォルムを決定するプロセス/内部空間決定のプロセス”に於いて“スケール感に基づくデザイン”の決定”空間デザインの意図を施主と共有するコミュニケーションツール”として重視していること」事例として“住宅の外形モデルを数十例作り、デザインを絞り込んだもの”また“内観のモデルを家具の詳細迄作り込み内部空間が感じ取れるまで模型で表現し自らのデザイン決定のツールとすると共に、施主への体感表現ツールとして用いた”事例が紹介された。②「手書き図面を“大事な部分・伝えるべき所をはっきりと強調できる表現手法”として、C A D図面の均質性に比して有効な検討手法・コミュニケーション手法である」と考え用いていることが具体的な「手書き図面、手書き納まり図、手書きディテール」として説明された。③「施主の持ち物/物量調査を徹底して行い、寸法・形状メモを手書きでノートに詳細記憶。徹底した収納計画を反映させた機能的なプランニングを重視していることが両氏の特徴ある設計プロセスであることが説明された。等々、組織事務所・ゼネコン設計部とのアプローチの差異/きめの細かさ、設計者の価値観を設計行為に素直に生かすといった「アトリエ事務所らしさ・姿勢」を明らかにしてくれた。

また両氏のパートナーシップのあり方についても、男性・女性の建築家の良い面を補充し合った「協働のありかた」を今回の講義のやり取りの中で感じた取った学生も多かったのではないであろうか。(記：斉藤博)

●2時限「建築とエンジニアリング」

奥村祐介氏 (H19卒) Arup

2009年武蔵工業大学大学院卒業、同年「アラップ東京事務所」に入所。構造エンジニアとして活躍。大学時代は濱村研究室で構造を専攻しながら“哲学書”を愛読する日々であったという。「オヴ・アラップ」との出会いには「哲学者アラップが土木工学を修め、そこから生み出された“哲学+エンジニアリング”への独自の基本理念」に自らの信条と共鳴するところを感じたからという。「Arup」は多様な分野の専門家が協働して、より高い品質のプロジェクトを達成できるような、「技術設計のプロ集団」としてチームで仕事をする社風を備え、「アーキテクトとエンジニアが協働するエンジニアリング事務所」である。「シドニー・オペラハウス」を初め「ポンピドールセンター」「ロンドン・アイ」「レンゾ・ピアノ/関西空港」等多くの世界的な名建築の構造&エンジニアリングを担当した。こうしたプロジェクトになぜ「アラップ」が参画しているかは「アラップがその建築の本質を掴み、“構造+エンジニアリング”がそれを開花させる、将に“エンジニアリング+哲学”がその基本を貫いているから」である。奥村氏はこれまで「構造エンジニア」として活躍してきたが、現在は「環境をテーマとした構造エンジニアリングの独自の領域を拓きつつある。氏は言う“構造は形を創り、設備は快適な場/ストーリーを創る”と」構造発想が「身の回りのモノ」から近似される“構造のヒミツ”について多くの事例が紹介された。また「アラップの全世界37か国、1万人のエンジニアをインターネットでつなぎ、テーマへの支援・アイデア等を世界規模の才能で24時間結び付けるネットワークシステム」が現在のアラップパワーの源であることが紹介された。例えば奥村氏にアイデアがあれば、インターネットを通じて世界のエンジニアに打診すると、複数の支援技術が翌日には地球の反対側から届く。こうして多くのバックアップを得て、プロジェクトとして実現させることができるという。氏は同時に創造に向けて「決断力の重要性」を主張。多くの学生から「決断すること」についての質疑があり、具体例に沿った応答が為された。奥村氏の今日は「哲学の素地」と共に「自分を信じ切り、自らを曲げない姿勢」があって到達し得たものと言える。(記：斉藤博)

8月3日(月) 担当委員：大藪元宏、桑原茂、米澤昭

●1時限「クライアントが求めるBIM」

村松弘治氏 (S57卒) 安井建築設計事務所

講師は、1982年卒の村松弘治氏である。村松氏は、アトリエ・ドムを経て、ヨーロッパに遊学後、安井建築設計事務所に入社。現在は、常務執行役員として「B I M」による設計の先頭に立っておられる。講義では公共・民間の設計実例を交えて、わかりやすく「B I M」の持つ意味、手法、効用等について説明していただいた。「B I M」はBuilding Information Modeling の略で、設計のスタートからイメージする建築を3Dで設計し、デザイン・コスト・品質・生産性・事業計画・維持管理を、同時に「可視化と統合」し、クライアントの要望にこたえてゆく設計手法である。「B I M」の強みについては主に以下がある。

- ・すべてが、3Dで進められるので、デザインの検討、プレゼを常にCGで行い、同時にコスト比較がスピーディーにできる。
- ・上記の複数の項目について構想の段階から平行して同時に進めることにより、基本構想から工事発注までの期間短縮が実現する。
- ・ファシリティアマネジメントやメンテナンス（維持管理）の効率化とコストダウンも設計と同時に検討、データー化・可視化できる。

以上のような骨子のお話であった。最後にこれからの設計手法のトレンドになっている「B I M」を用いるには「使い続けること。一歩先を見、読む」事が重要というアドバイスで締めくくられた。(記：大藪元宏)

●2時限「dash up」

新居未陸氏 (H12卒) 新居千秋都市建築設計

本日の講義は、BIM^{*)}をテーマにしており、筆者の業務とも大いに関係があるため、仕事を抜け出し受講することにした。1時限目の松村講師(安井建築設計事務所)が模範的なツールとしてのBIMの使い方を講演した内容であったが、2時限目の新居講師の講義は、BIMと言うより3D CADの活用方法に関する内容であった。講義は、インパクトのある自己紹介から始まった。本学建築学科を卒業の76 agesで、大学院は英国Y^{*)}へ進み、帰国後はお父様の新居千秋都市建築設計に勤務されている。BIMの優位性として、構工法を伝えやすい、構造計算プログラムに乗せられる等を挙げていた。実際の使い方として、3D CADでモデリング(設計)したものを、2Dの展開図に起こす寸法を入れ製作図としているが、これは職人が2Dの図面でない理解できず、仕事ができないからという説明は興味深かった。また、2Dの図面から3D CADに紐づく直し、検証することで2D図面を担保するという方法も興味深い事柄であった。本日のテーマである「dash up^{*)}」について、「設計は、最終的に技術の組み合わせのアルゴリズムであり、デザイン要素は殆どない」という説明は、設計行為が真幾らからStep幾らに変貌するかも知れない衝撃を私に与えた。以上、若さ溢れる大変すばらしい講義内容であった。(記：米澤昭)

^{*)} Building Information Modeling (建築物情報モデリング) の略称で、コンピューター上に作成した3D CADモデルの各部品に、寸法、位置に加えコストや仕上げ、管理情報等のデータを属性データとして定義したCADとデータベースの統合モデル。あらゆる定義が可能で、それ故、建築の設計、施工から維持管理までのあらゆる工程で情報活用可能となる。コンカレントなワークフローとなる。

^{*)} The Bartlett School of Architecture. <http://www.bartlett.ucl.ac.uk/architecture>

^{*)} つつ以上のコンテンツで構成するオブジェクト。音楽のdash upの概念をCADデータのコンパートに用いている。

●3時限「大林組のBIMの取組み」

五十嵐恵理子氏（H4卒）大林組

五十嵐さんの講義は、伝統的な建築生産論の講義で、亡くなられた江口先生が聞かれたら「A＋」を頂けるであろうと思える良い講義であった。五十嵐さんの講義の素晴らしいのは、五十嵐さんの経歴がそうさせたと思わせるもので、女性が建築学科に入学したこと、GICに就職したこと、システム開発に取り組んだこと、生産設計部、建築本部PDセンターを渡ってきた経験の結果としてBIMに取り組んだ必然性が分かった内容であった。3D CADを活用することで、コペバに応募するエンジニアに仕立てたり、設計内容説明用にアニメ化したりするという多様な使い方はこれまでも多くあったが、スナップショットした設計図を時系列的にキュービックに保存し、検証しているという説明は、活用方法が課題となっているBIMにとって、新しい使い方が示されたと感じた。また、大林組では、BIMを活用し、生産設計から施工図/総合調整図、生産設計図までについて適用し、200社に渡る関連会社に関わっているとの説明は大変興味深かった。講義の最後に、BIMによりコンラレント なビジネスフローが行われており、プロセス革命であるという説明は、未来の建築生産を示唆するメッセージであった。大変内容が深いもので、はたして学生がどれほど理解できたかは不明であるが、感動(passion)は伝わったと思う。このような講義は、社会人向けに行うと更に効果があると感じた。（記：米澤昭）

●4時限「デジタルテクノロジーと建築」

討論会

この日はBIMをキーワードに授業を構成し、村松弘治氏・新居末陸氏・五十嵐恵理子氏のお三方によるレクチャーの後に、座談会形式による討論の機会を設けました。コメントを軽くご紹介しレポートと致します。

問①：コンピューターを使うことで人間らしい温かみや感性は薄れてしまうのか？

村松氏：企画、基本・実施へと段階的な区切り付がなくなり、始から終点までをシームレスに考察しながら作業を進めていくことが出来る。より多角的な検証が可能なのでむしろ豊かな感性を織り込んでいけると考えている。

新居氏：バーチャル環境内で構築したモノは、実体化されるまで問題に気が付かない危険性もある。専門性がより細分化されることで小さなチームに過大な責任が偏在してしまうことは懸念している。公共性の高い建物を設計しているため、ワークショップ形式などを取り入れると悪い意見も吸い上げられるようにしている。

五十嵐氏：施工計画を建てる際にBIMを使っている。部材の干渉も事前に把握出来るので道具としての利便性は素晴らしい。PCが勝手に計画を遂行してしまう訳ではないので、使う側がしっかりとした理念を持っているかが重要である。

問②：データが一か所に集中していく。コピペや悪用でオリジナル性が失われるのでは？
村松氏：チーム内のデジタルデータは編集が容易だが、その分、専門家の意見を柔軟に反映させていけるメリットがある。誰にでも開示されている訳ではない。

新居氏：雛形を汎山集めれば、その組み合わせからあらゆる問題に対処出来るという考え方も生まれているのは事実。活用方法を固定化せずに自由な概念を盛り込んでいけないとその危険性はあるのかも知れない。

五十嵐氏：情報を共有化するののは、プロジェクトに関わる様々な立場の人が状況や問題点について理解を深める為で、開ざされた誤解で無くなるのは良いことであると考えている。一方で、誰も彼もが参加出来るような訳ではないので、独創性が消える訳ではない。

等と、40分程に渡って活発な議論を交わしあって頂きました。（記：桑原茂）

8月4日(火) 担当委員：長谷川朋子、舟岡努

●1時限「住宅設計の魅力」

伊瀬知侑子氏（H17卒）東急ホームズ

伊瀬知さんのは、まずはじめに、ご自身の就活の際、50社以上履歴を回った経験から、会社はWEBの情報だけで判断するのではなく、同じ住宅メーカー設計部でも、業務範囲が違うので、必ず説明会には足を運ぶこと。そうすれば、その会社の特色が見えるかと、学生たちにアドバイスをくださった。東急ホームズに入社2年くらいは、CADオペレータや積算や確認申請の書類作成などで、お客さまの前に出ることもなく、つまらなかったとのこと。どんな仕事でも、やりたいことだけやっていればよいということとは、まずないわけで、ここで挫折するようでは、何の仕事も動まらないと思うので、ここが最初のがんばりどころということだそう。

東急ホームズのMillcreekシリーズは、モダン建築とは真逆の北米スタイルのこっくりしたデザインの住宅で、最初はや戸建てというのだが、現在の図面やスケッチ、パースなどを拝見する限り、シリーズの特徴をおさえて、自分のものにされているのがわかる。

住宅メーカーは、仕事がかなり分業されている、内部・外部のスペシャリストをコーディネートすることも、重要な仕事であるという。コミュニケーションの力量が問われる。一方、住宅をNET販売の時代。WEB上でカスタマイズでき、展示場替わりになっていて、問い合わせもE-Mailによるものが増えている。対面だけのコミュニケーションだけではないようだ。後日WEBを拝見したところ、WEB上で、好きなときに家づくりのシミュレーションができて、価格もリアルタイムでわかる。これは、「建売より注文住宅がいけど、相場がわからなくて敷居が高い」という施主にとっては、うれしい窓口である。話がそれた。

分業のためか、担当件数は多く、10年で約200件。施主もさまざまだ。住宅メーカーという性質上、デザイン優先でないお客さまも多く、正直、納得できない設計をすることもある。理解しがたいこだわりをもつ人もいる。伊瀬知さんは女性・主婦であるがゆえ、お施主さんの奥様と共有できることが多いのは強み。ここ住宅に関しては、在宅時間が長い奥様の意見が強いことが多いので、女性の担当者として指名されることもあるとか、私も、共有できる経験を持つ人には、相談がしやすい。そして、仕事をできて一番うれしいことは、家ができたときのお客様の「ありがとう」。住宅は一生涯に何度も大きな買い物ではないだけに、この「ありがとう」は、きっと何よりも大きな気持ちのこもったものに違いない。担当件数が多分、この大きな「ありがとう」もいっぱい受け取っていることだろう。

休日には平日なので、友達がほとんど減っているというが、まだまだお若いので、仕事だけではなく、いろいろなことに挑戦をしてみたいだきたい。結婚されているが子どもはいない。今後子どもができて、この仕事を続けていきたいという。伊瀬知さんのような女性建築家が、東京都市大からたくさん巣立って欲しいと願う。（記：長谷川朋子）

●2時限「日本の建設業界におけるガラスメーカーの役割について」

島田 大氏（H3卒）AGC硝子建材

大島直文氏（H7卒）旭硝子

建築素材メーカーは、建築マーケット環境の変化に応じて、ビジネスモデルを変化させてきた。現在はそしてこれらの動向とともに、建築を支えるメーカーの役割を講義いただいた。本講義では、ビジネスフィールドの異なる大島氏と島田氏を各々の業務に講義した内容と技術・商品を紹介された。

前半は、世界最大級のガラスメーカーの最前線で営業、事業推進として活躍する大島氏が、ガラス業界、世界市場動向、ガラスの機能、製造、建築用製品、そして、非住宅外装のユニット化や住

宅分野でのサッシメーカーによるガラス&サッシの一体供給などの近年の興味深い変化も含め解説し、建築用ガラスを俯瞰した。また、建築用素材を観客に営業するとはどのようなことなのかを具体的に説明され、数々の著名な建築物にも多く関与し、その実現に寄与していたことが実感され、建築は多くの知識と経験、そして関わる人の労の集積であることとあらたな確認をすることができるとお話であった。旭硝子では意外にも建築技術系の社員は希少とのことで、だからこそ活躍できる側面もあるとの話題を引き合いに、建築学科出身者がメーカーに入るということについて

の話題は、学生にとって将来を考える参考になったのではと思う。後半は島田氏が素材メーカーの別の側面を紹介した。島田氏は素材メーカーが展開するソリューションビジネスのひとつであるシステム商品と呼ばれる材工一括受注を直接展開する場合設計を担っている。建築設計とはプロセスの異なる、外装の物件実施設計の実務と体制について説明のあと、実例として「横須賀美術館」が紹介された。鉄板構造の本体の外側をガラスの外皮で覆う形態で、面白い。建築現場での外装定例、モックアップなどの意味合いを、実務体験を通して苦労話を織り交ぜながら、楽しむかのようにお話をされていた。物件ごとに異なる設計を行うために、苦勞も多いようだが、ガラスメーカーならではの役割を感じ、著名な建物にも関わることもでき、意気に感じるとのことであった。

学生からは、材料メーカーを選択した理由が質問され、お二人の就職の際に考えたことが紹介された。建築分野にメーカーを多角的に知ることができると感じた。（記：舟岡努）

●1時限「台東区のまちづくり-行政における建築技術者の役割-」

田辺裕美氏（H17卒）日建設計

講義は、「白金の丘学園」と設計・監理に携わった田辺氏の動きを軸に進んでいた。「白金の丘学園」は港区立の小中一貫校で、新建築2015年6月号に紹介されている。前例のあまりない6階建てである。設計当時に既存の「選刺坂」「森の風景」などをみて、生徒の成長や活動を感じながら空間と形を思考する過程が、本建物の写真をめくると、ひとつひとつの部分について丁寧に説明されていく。形、プロセス、動機、条件の関係がよく理解でき、興味深く聞き入ることができた。

田辺氏がこの仕事に係る経緯や仕事を取り巻く状況についても紹介された。設計実務を組織的に経験していない職業には参考となるお話であったと思う。また、実務ではありがたい、人間関係や組織とのすり合わせの問題などを含んだ話は、明るく、軽妙にお話をされていたが、長い社会人生活を送ってきた者にとってはご苦勞が身につきまされてしまう。人との関わりが良好に変化したことや、すばらしい建物として結果したことが、地道な努力や取り組み姿勢であったことを、聴衆が汲み取っていたら幸いと思う。

田辺氏の講義は日建設計の紹介、学生の頃に通っていたこと、考えていたこと、初めての仕事のこと、今の仕事の楽しいところなどが多々語られ、実務についているOBの講義ならではの充実したものとった。（記：舟岡努）

8月5日(水) 担当委員：小林秀憲、小林捨象、基真由美

●1時限「ワクワクする学びの場をつくる～楽しく働くための秘訣～」

松島咲季子氏（H21卒）イトーキ

松島氏は、2009年に卒業し、2009年から2012年まで株式会社 丸善に在職し、図書館等の家具計画に携わった。そして、2012年に現在の勤務先である株式会社 イトーキに入社した。イトーキにおいては、図書館等の計画や家具計画の仕事を中心としてきたが、現在はR&D戦略企画部 教育・健康市場開発室にて教育施設の企画から設計まで行っている。

特別講義の講師の中でも卒業年が新しく、聴講した在校生にとって身近な存在であり、各自の心に響いた講義の内容であった。

松島氏は、最初に「夢」を話した。「楽しく仕事をする人たちが増える社会をつくっていきたい。」ことを目指し、仕事を通して社会に貢献し個々の生活を変えていこう、良くていこうという強い意志を感じられた。

「学生時代は、人も学習の仕方も自由」、「学年を越えた家族の様なつながりがある」都市大建築学科の気風の中で、人と話をし、刺激を受けることで自分を成長させていった。学校の課題作成を通して、人の動き・人との距離感・人との関わりなど、人の行為の原点性を徹底的に考えていく設計手法を見出した。卒设计中、「公共の書斎空間」をテーマとして、スケッチを多量に描き、図書館設計の権威である岡田新一氏より、「夢があっていい」との評価を受けた。

「就職活動」においては、自身何がやりたいのか分からない状態で、いろいろな会社を受け、丸善の設計部門に入社した。丸善では、雑務全般を行い、放任主義、全ての作業を一人で黙りに行う3年間であった。その後、コミュニケーションデザイン系の会社に入籍したのち、イトーキに入社した。「人生で起こること起こす全てのことには無駄ことはない。」ということが、松島氏の信条であるが、現在それぞれの会社での経験が実績になっている。

「現在」、イトーキ入社後、「ハコの中身のデザインは、人間の行動に深く影響を与える仕事である」ととらえ、教育施設の計画に携わるようになった。「都市大図書館地下改修」、「都市大二子玉川サテライトキャンパス」など都市大関連の計画を都市の立ち上げより行った。

「未来」、自分の強みは、さまざまなゾーンを積み重ねていくことであり、10年後には、教育空間をいっしょに考えるパートナーとして「子供たちが夢を持っている」、「大人たちが楽しく働く世の中」の達成のために、ポジティブに仕事をしたいこととする松島氏に多くの学生が、影響されたに違いない。（記：小林秀憲）

●2時限「総合組織設計事務所」

豊永正登氏（S55卒）久米設計

豊永氏は、昭和55年武蔵工大建築学科（哲原研究室）卒業、57年同大学大学院工学研究科建築学専攻卒業。同校久米設計入社。設計部長等歴任後、現在は、取締役 専務執行役員 業務・設計担当を務めている。

豊永氏は、入社後、「東京電子健康保険センター」を担当し、建築設計だけではなく家具や食器まで設計した。その後、「国分市庁舎・図書館・多目的ホール」、「仙台港国際ビジネスサポートセンター」、「ニチコン本社ビル」等多くのプロジェクトを担当してきた。久米設計は、現在、社員数約600名の日本でも有数の規模を誇る総合組織設計事務所である。久米設計の代表的なプロジェクトとして、「恵比寿ガーデンプレイス」、「赤坂サカス」、「さくらホール」、「ライオン本社」、「日本赤十字医療センター」など学会賞にも輝くプロジェクトがある。

総合組織設計事務所とゼネコンの設計部との違いは、前者は公共施設の設計を行うのに対して、後者は行わない。また、アトリ事務所との違いは、組織事務所は設計した建物を継続して見届ける事が出来るのに対して、アトリ事務所では、一代限りとなってしまつた後、後の面倒まで見届ける事が難しい。組織事務所は、人材が命であるため、社員の教育が重要であると捉えている。最初は、手とり足とり位、丁寧に教育する必要がある。

建築の設計は「ビジネス」である。建築物のことを「作品」と呼ばないようにしている。従ってビジネススキルが必要で、コミュニケーション力やマネジメント力が重要となってくる。久米設計の行動指針として「アーキテクトマインド」と「ビジネスマインド」を定めている。

今後の日本国内の設計業界は、国内全体の建設工費費の減少、さらに人口減少により縮小していく傾向にある。そのため、海外進出を進めていく必要がある。久米設計は、東アジア、東南アジアへの展開を行っており、アジア各地で価値を創造し「資産」を設計する会社を目指している。

最後に豊永氏は、新しい設計者を志す社会人となるために、①「仕事も遊びもシームレス」音楽や映像など様々なものを感じることににより成長する。②「測る」、「触る」など常にスケールを持ち歩いてほしい。③「自分に投資する」、「体験する」旅行など日常では、経験できない空間などを体験する。事を心にかけてほしいと学生にアドバイスした。（記：小林秀憲）

●3時限「博物館をつくること」

中島 実氏（S57卒）丹青社

高田和重氏（H4卒）丹青社

土木工学科出身の高田和重氏（H04卒）と建築学科OBの中島実氏（S57卒）を講師に迎え、5号館小講堂で特別講義が行われた。両氏が所属する丹青社はディスプレイ業界を代表する企業であり、商業空間はもとより、博物館などの文化施設やイベント空間の分野で実績があります。両氏とも同社の文化空間事業部の中心的存在として活躍中です。

最初に中島氏が会社の紹介があり、ディスプレイ業界の広がりや他業種とのつながりに言及し、業務のフローと役割に関して解説。804名の社員のうち197名がデザインに関する業務を担当し、プロジェクトの構想から、基本計画、設計デザイン、施工製作、運営管理に至るまでワンストップでトータルにプロジェクトの推進と実現に関わる。いわば企画事務所と設計事務所とゼネコンを合わせた、プロフェッショナル組織と言える。

中島氏は、2013年度の第1回進路ガイダンスで、インテリア・ディスプレイ業界を代表して講師を務めていただいた経緯があり、丹青社のデスクがダントツで学生に人気があったのも、このような幅広い世界に将来の夢を託せるところに、その理由があったのかと納得した次第。

続いて高田氏が登壇。土木工学科の鋼構造研究室の出身でありながら、広告代理店や放送業界といった、土木とは無縁の業界にリクルート活動の末、現在のポジションに至った経緯を紹介。担当した多くの文化施設の中から、今年7月にリニューアルオープンしたばかりの国立科学博物館／地球館をとりあげ、設計から製作までのプロセスを深掘りして解説してくれた。基本構想コンセプトは「宇宙・生命・人類が奏でる138億年の壮大な物語」。完成した地球館の展示をビデオ映像で紹介して、その設計デザインや製作のプロセスを解説。一つのプロジェクトに実にさまざまな分野の多くの人々が関わり、膨大な作業の積み重ねを経て一つ一つの展示作品が作られ、全体の展示空間が出来上がっている。特に興味深かったのは映像ソフトと標本模型の製作展示に関する話。ハコモノの箱を作るのではなく、正に中身そのものを作り、その演出展示のための空間を設計・製作する。映像ソフトの制作では、ノーベル賞受賞者への取材で撮影クルーに同行してボストンまで行き、下村脩博士と利根川進博士にお話を伺うという貴重な経験もされている。最後に、仕事を通して人とつながること、深く繋がることの大切さに触れ、その素晴らしいさを語って降壇。

このあと学生の質問を受けて、中島氏から、さまざまな業界を知ること、人とコミュニケーションできる力をつけることが大切とのアドバイスをいただいた。他学科出身のOBが特別講義を行なったのは今回が初めてではないが、稀少なケースであり、たいへん有意義であったと思います。これを機に、毎年1人くらいは他学科のOB・OGに講師をお願いして、繋がりを広げていけたら良いのではないのでしょうか。（記：小林捨象）

●4時限「建築プロデュースという仕事について」

岩本 裕氏（H8卒）リアルゲイト

岩本裕氏は、建設会社、不動産業勤務を経て、2009年に株式会社リアルゲイト（トランジットグループ）を設立。学生時代にあまり勉強しなかった分、知識を吸収する余裕が十分にあったと回想する岩本氏は、都内に20棟以上オフィスビルのリノベーションなどを企画する会社の代表取締役を務める。今までやってきたことは一貫していないように見えがちだが、自分の悪いところを認め、向いていることを探し続けてきたことが現在の活動に活きているという。

建築プロデューサーは、オーナーやイテコムの立場で考えるべきというスタンスも、不動産の営業活動に得た知識や経験からである。ユニークでエッジのあるあそび場を創造する時代の叫び者として、良いものをたくさん見ると、そしてすぐに実践することが、ニーズに合ったクリエイティブな活動を続ける秘訣であると語る。「5年後、10年後をどう考えますか?」とよく聞かれる質問に対して、「ビジョンはない。トレンドを察知して舵取りすることが大事」と常に答えているというエピソードからは、華やかなイメージの建築プロデュース業界においても、今やれることを確実にやる姿勢が大事であると感じさせられた。

作品の紹介では、サービスアパートメント、ラウンジ、オフィスなどを併設するインバウンド事業・新作「HIVE TOKYO」。外国人向けの物件としては、初期投資が低く、デザイン性のあるオフィスは、割高と思われる家賃設定でもニーズがある。

都内の好立地に建つ「POTAL POINT」。築40年のオフィスを、フロントコンシェルジュがホテルライクなサービスを提供するシェアオフィスにリノベーション。約200㎡のロビーとラウンジ、コンベンションルームを併設し、スタイリッシュな場所での打ち合わせやプレゼンなどにも利用できる。ワークスペースは、デスク使用のプランから、最大42㎡の個室まで、様々なビジネスプランに対応する空間である。

完成した物件をよく見せるか、というのも大切な事業である。映像をつかったプロモーション映像も何本かを見せて頂いた。プログラムやロゴデザインなど含め、総合的なプロデュースを行う。何をつくるか、どんなデザインか、いくらく稼ぐか、いくらく使うか、いつまでに完成させるか。不動産に対するトータル的なプロデュースが必要とされる。これからの若い人たちに、自分なりの感性を持つこと、（ペストを尽くす事を期待すると語る岩本氏の熱意が、学生たちの心に突き刺さったに違いない。（記：基真由美）

8月6日(木) 担当委員：露木博視、丹羽譲治、小笠原良二、池谷透

●1時限「東京を世界一の都市に、建築と変わりゆく不動産業界」

吉松晃士氏（S55卒）森ビル

吉松氏と私とは同期で、S55年に大須賀研を卒業されました。当時、建築学科を出て不動産業界に就職することは珍しかったのですが、後に森ビルが、「第〇森ビル」からヒルズ構想を主体とする都市づくり企業に変貌したことを考えるとなかなか先見の明がある選択だったと思います。入社後、吉松氏は35年余りの間に、デベロップの川上から川下まで、更には社内の金融部門と、主要な部署を次々と経験されてきました。（注1）

今回、吉松氏は、これらの経験を通して知り得た森ビルの魅力の全てを学生に伝えたいとの想いから、用意された講義のレジュメは、内容豊富なものでした。（注2）

講義が始まり、

・『国際都市間競争に勝つには、「都市の磁力」を高め、世界から人・もの・金・情報を惹きつけなければならない。そのため都市づくりをしなけなければならない。』と言う森裕氏の言葉を、「世界の都市総合力ランキング」等の資料で現在の日本の位置を示しながら具体的に説明。

・各ビルズプロジェクトのコンセプトと施設概要を解説。特に六本木ヒルズの「街づくりの方針」は圧巻であった。と順調に進んだのですが、残念ながら、レジュメ半ばで講義終了時間となってしまいました。続きの講義は、後の懇親会において、学生達と吉松氏が組まれた円陣で熱弁を振るわれていました。後日、吉松氏からいただいたメモから察すると、氏が建築学科の学生に特に伝えたかったのは、講義できなかったレジュメ最後の「金融の話」ではなかったかと思います。『建築出身者には、苦手の分野がもしもままが、経済について知らずに社会に出ていくと、知らない感性はいくつになってもわからないままになってしまいます。』という氏の想いがメモには記されていました。ただ、この内容は難しいので、今度機会があれば知学会でOB対象に話をしていただけたらと思います。（記：露木博視）

注1）吉松氏の森ビルにおける主な職歴

・管財部(不動産資産すべての現物管理)・設計部(A R Kヒルズ計画グループ事務所兼様)
・開発企画部(内仕入業務)・内装部（入居テナント内装工事請負業務）
・仕入部（発注業務）・企画・財務部(保バラスト・アセットマネジメント：不動産証券化の運用等)
・森アーツセンター事務局(六本木ヒルズ森タワーの文化施設の運営)

注2）講義のレジュメ

1.現代化する国際都市間競争

・世界の都市総合力ランキング（GPCI）

2.国際都市間競争に勝つ都市再生事例

・六本木ヒルズプロジェクト

・上海環球金融中心プロジェクト
・虎の門ヒルズプロジェクト
3.都市再生を加速化し、国際新都心を形成
4.最大かつ最後のチャンス
・国家戦略特区
・2020年東京五輪
5.都市の未来
6.建築と変わりゆく不動産業界・不動産の金融化
・不動産と金融の融合（国債と金利、投資と利回り）
・金融商品としての建物と証券化
・リートと都市再生
・PPPについて

●2時限「環境コンサルティングの仕事」

小田桐直子氏（H8卒）佐藤エネルギーリサーチ

講師は本学を1996年に卒業し、5つ目の職場となる佐藤エネルギーリサーチに所属し環境エネルギーの調査研究と啓蒙に従事している。文部科学省「文教施設セミナー」講師等の経験から、判り易いナレル構成で温暖環境に関する理解を深めることが出来た。授業の実験で温暖環境に興味を持ち、宿習期間中に在籍したことや、就職活動と反省点を示され、学生にとって意義ある講義であった。

卒業後、システック環境研究所に7年在籍し主に住宅の快適性や省エネ、コンビニの省エネのコンサルタント業務をした。次に鹿児島工務店で、住宅の設計+工事(資材の発注や現場監督)を1年経験する。その後、ハウスメーカーのCADオペレーターを半年経験し、設計事務所で6年間環境省の「学校エコ改修と環境教育事業」の事務局を務めた。そして現在の佐藤エネルギーリサーチに至り、学校の快適性向上や省エネのコンサルタント業務に重要な役割を果たしていると思った。木造住宅の断熱・気密は、人だけでなく建物自体にも必要であることを被害状況写真・図を交え断熱化と内部結露被害の恐ろしさを伝えた。断熱のための気密と防露のための気密について話され、断熱のための気流止め、防露のための防湿シートの重要性に言及した。地球温暖化防止には改修(ハード)と教育(ソフト)の両方が必要であると説いた。学校建築を題材に「ゼロエネ」について話された。ゼロエネリサーチは、無駄を省く「省エネ」+「創エネ」で太陽光発電を搭載すれば必ず達成できるものではないかと省エネの手法として風の塔、北側採光、ルーバー、緑のカテナ、ライトシェルフ、ナイトバージ、断熱化を挙げた。特にライトシェルフの効用として照明の省力化と日射の遮蔽をあげ、外部日除けの無い窓面は、日射でカテナが5,000㎡の熱量を持つとの話に興味が引かれた。教職員全員に使い方を説明会を開き、同じ資料を用い生徒に対してより行う事で建物の特徴を理解し、「適切な運用」によって、省エネを図ることとなった。

大学時代の反省点として東京大学・池谷教授の脳の仕組みを説明し「やりはじめないと、やる気は出ません。」「は、学生のみなさん我々社会人にとっても有益な警句であった。他の講義も受けて、対象が学生だけではなくもったいないという感じがした。卒業生が受けられる時間帯にするが、別途卒業生用に開催するかを考えても良いと思った。（記：丹羽譲治）

●3時限「社会に出るということ」

北嶋亮介氏（H22卒）イリア

第1部では勤務先の会社概要、入社してからの仕事内容について語った。就職先は鹿島建設系列の内装設計・施工を行う「㈲イリア」に入社し、コンストラクション部に所属している。「デイング」、「コンストラクション」、「家具」を中心とし、北嶋氏は内装工事一連の仕事を行っていた。仕事は空港ターミナル、ホテル、オフィス、大使館等の色々な内装を行い、入社3年目で現場管理の責任を任せられるようになった。内装業務は主に「インテリア」、「ディスプレイ」からなり、イリアはインテリアを中心としている。普段から他社の作品の伊勢丹、ルミネなどの店舗内装も見るとに心がけている。

第2部は大学時代の就職活動について語った。将来の就職先の職種また学歴（学部卒・大学院卒）の選択を早めにを行い、設計の道も考えたものがのつくりが好きで早く現場で職人の方と一緒に仕事をしたいだったので学部卒業で就職を選択した。若いころから内装に興味があり、下北沢商店街シャッターアートなどに触発、演劇の舞台チラシの作成、釣りのルーア作りが趣味であり、ものを作るのが好きだったので内装業を自分の職業として選んだ。大学の研究室は「色と光に近い部分で空間をつくりたい」という研究テーマで小林研究室に所属した。就職先には内装業界トップのN社を希望したが最終面接で落ち、結果として現在の勤務先のイリアは学校推薦で入社した。多くの内装会社を試験を受け、会社下見も30社近く事前に戻り、入社希望の会社研究を事前に行い、入社的主旨をレポートで纏めて提出した。最終面接までいったのもあったが熱意は伝わった。大学時代の作品などをポートフォリオでまとめ就職先の会社に合わせて構成を作り直した。履歴書は市販でなく自分に合わせたフォーマットを作成し、学生時代に習得した資格、及び「インテリアコーディネーター資格取得予定」という資格予定も含めて記載し、特記に就職希望理由をアピールする内容を詳しく記載した結果、履歴書の評価は高かった。学生時代に習得可能な内装関係の資格の「照明コンサルタント」、「商業設計士補」などを習得しておくと良い。北嶋氏から学生に対して、「1）将来の職業を決め過ぎても良くないがある程度の方向性は持つ必要がある。2）自分のビジョンを持つ必要があり、ビジョンがないと就職先は腰かき3ヶ月程度でやめるようになる。3）自分と向き合い、自己分析をすることが必要である。4）就職活動として事前に企業研究を行い、希望先・自分に合う履歴書・ポートフォリオの作成を行う。」という意見を伺った。

北嶋氏は内装業の仕事は、多くの用途の工事を短期間で色々な業種の内装に関わるための、人の飽きやすい性格に合い、人々の記憶に残るような誇りをもった仕事であるという。貴重な講義を拝聴し自己分析の姿勢、仕事への情熱を強く感じた。（記：小笠原良二）

●4時限「最近の耐震・免震改修のいろは」

鈴木裕美氏（S56卒）大成建設

講師の鈴木裕美さんは、1981年に安藤研究室を卒業され、大成建設（株）設計本部に入社、構造設計、特に耐震改修一筋に仕事をしてくられ、現在は、設計本部・構造計画部部長の職に有ります。

今回は、「最近の耐震・免震改修いろは」と言う題目でパワーポイントにより具体的な耐震改修事例を解説して頂きました。学校などの補強に使われる鉄骨のK型フレームやR C壁による補強などの一般的耐補強ではなく、それぞれの建物に合った鉄骨がなされた耐震改修例であり、とても興味深い内容でありました。

第一番目の改修例は、既存建物の特徴である水平・鉛直のデザインに調和する美しく、開放性・居住性を損なわない「グリッドフレーム」による改修例です。そのファサードは改修後もとても魅力的であり、まさに、「魅せる補強」であります。ロビー部分の斜め格子状の銅板と強化ガラスを組み合わせた開放性の高い「T.G-WALL」も、とても補強部材とは思われないデザインで感心しました。

第二番目の改修例は大江14年に某大学図書館として創建された歴史的建物であり、耐震改修に当たり、既存の蔵書数を変えずに補強する工夫として、銅板による書棚形状の補強部材で、「T.T-WALL」を考案し配置しております。この補強部材も全くそれとは思われないデザインで、すばらしい発想だと思います。

第三番目の改修例は昭和初期の旧庁舎建築であり、歴史的文化的価値を保存しながらの改修例です。既存建物の性能をよく調へ適切な補強方法を用いている。特に、地盤改良JSG改良型工法がユニークである。免震改修の例として、現在施工中の某区役所本庁舎の耐震改修例の説明がなされました。庁舎なので当然居ながらの補強ということで免震改修が考えられましたが、繁華街に位置しており、免震に必要な一般的な臨境間隔がとれず特殊なオイルダンパーの開発や、免震層の工夫により予算をクリアし、施工上の配慮も大変、大手ゼネコン設計部の技術の高さを感じました。

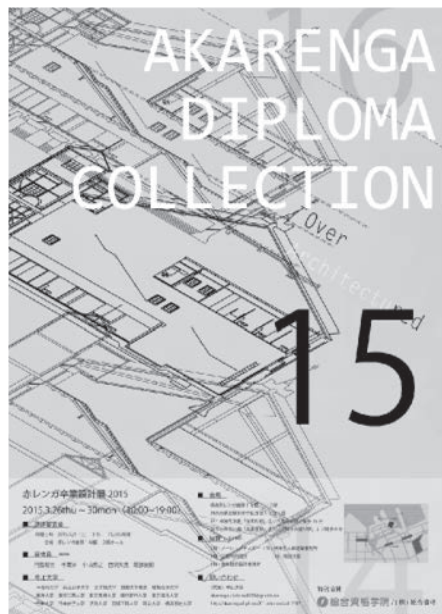
制度補強の例としては、長周期対策のための補強例として、新館の超高層ビルへの改修例を説明して頂きました。これからの建築界を考えると、既存建物の改修は必須である。以上の耐震改修例を通して、設計者として、常に良いものを作ろうと工夫することが大切であることを改めて教えられました。多くの学生が興味をもったのではないかと思います。（記：池谷透）

福士貴仁君 西沢大良賞受賞
片島一裕君 堀部安嗣賞受賞

赤レンガ卒業設計展2015 「Over Architected」

2015.03.26—03.30

平山 大悟 (H26卒／東京都市大学堀場研究室)



「赤レンガ卒業設計展2015」ポスター

「赤レンガ卒業設計展 2015」が横浜赤レンガ倉庫 1 号館で 3 月 26 日から 30 日まで開催されました。第 12 回目の今年は東京都市大学を幹事校とした 16 大学 19 学科が参加し、建築学生の集大成である卒業設計 200 作品以上が展覧されました。横浜を代表する観光地である赤レンガ倉庫ということもあり、期間中には建築関係者だけでなく、一般の方を多く含めた 2000 人を超える来場者を動員することが出来ました。

今年は「Over Architected」というテーマを掲げて企画運営を行いました。卒業設計は建築学生にとって四年間の集大成です。しかし、そこで成長を止めるのではなく、社会に出た後、進学した後にも成長していかなければなりません。“卒業設計で過去の自分たちの建築 (architecture + ed) を超えていこう”そして、“赤レンガ卒業設計展を広く発信し赤レンガという枠組みを超えていこう (Over red)”という二つの意味をかけたものとししました。

3 月 29 日に行われた公開講評会は同会場 3 階大ホールにて開催し、6 人の審査員の先生方にご出席頂きました。午前中は巡回審査による一次審査を行い、二次審査会の 10 作品を選出。当日はたくさんの方々に来場して頂き、観光客、建築関係者、友人、家族、そして卒業設計を手伝ったであろう多くの後輩たちなどで、2 階展示場は大混雑していました。午後からは選ばれた 10 作品からグランプリを決める二次審査を公開講評会として行い、10 選として残った発表者は卒業設計で自身が考えたことを精一杯伝え、審査員の方々にはそれに対して鋭い質問を投げかけて頂きました。会場内は登壇者それぞれの熱意や緊張感などによって卒業設計の公開審査会特有の空気に包まれていました。4 時間にも及ぶ議論の末、結果は右記のようになりました。

私自身自身としては、10 選に残れなかった

悔しさ、運営側としてのプレッシャーなど様々な思いを抱えて審査会を見ていました。残れなかったという悔しさはありますが、それ以上に他大学の学生と知り合えたこと、建築について語り合えたことは今後の大きな糧になったように感じます。また、大きなイベントを開催するという大変さ、運営の厳しさなどを学ぶことができ、大変良い機会になりました。

昨年の 9 月から、卒業設計の活動の傍らで準備してまいりましたこの卒業設計展ですが、成功のうちに終わり大変嬉しく思っています。出展に際しては如学会をはじめとした関係者の皆様方に大変お世話になりました。この紙面をお借りして御礼申し上げます。本当にありがとうございました。

赤レンガ卒業設計展 2015

審査委員長

千葉学氏 (千葉学建築計画事務所)

審査員一覧

門脇耕三氏 (明治大学専任講師)

中山英之氏 (中山英之建築設計事務所)

西沢大良氏 (西沢大良建築設計事務所)

堀部安嗣氏 (堀部安嗣建築設計事務所)

表彰者一覧

最優秀賞 大村高広 (東京理科大学)

門脇耕三賞 菅野凌 (前橋工科大)

千葉学賞 加藤裕太 (日本大生産工)

中山英之賞 滝村菜香 (日本海洋建築工)

西沢大良賞 福士貴仁 (東京都市大)

堀部安嗣賞 片島一裕 (東京都市大)

出展大学

神奈川大学 / 共立女子大学 / 首都大学東京 / 東京工業大学 / 東京電機大学 / 東京都市大学 / 東京理科大学 / 工・理工 / 日本大学 / 海洋・生産・理工 / 日本女子大学 / 法政大学 / 前橋工科大学 / 横浜国立大学 / 昭和女子大学 / 工学院大学 / 東海大学 / 明治大学

追悼 望月 重 先生

東京都市大学 名誉教授

濱本 卓司

東京都市大学 教授



後列右から 4 人目が望月先生

本学名誉教授望月重先生が本年 4 月 22 日に 84 歳で御逝去されました。心よりお悔やみ申し上げます。ご家族から直接お亡くなりになったという悲報をいただいたとき、あまりに突然でしたため声が出ませんでした。その少し前に先生と電話でお話したばかりだったからです。足腰が弱くなり外出するのが難儀になったということはお聞きしておりましたが、そのとき電話を通して聞こえてくる声はいつものお元気な先生でした。

望月先生のお父様は大学の学長も務められた著名な僧侶で、先生は幼いころから厳格な空気の中で育てられました。早稲田大学に入学してからは御自宅の三島から東海道本線で毎日通学したそうです。三島という町はいたるところで富士山の伏流水が湧き出し、いつも清浄な空気が保たれている場所です。大学では、早稲田大学の構造系列の主流である内藤多仲先生や松井源吾先生に師事し、その後の先生のご活躍の基礎を築かれました。

先生は若くして武蔵工業大学の教職に就かれ、長期間にわたり学生の指導に当たってこられました。大学の教員にとって教育と研究は二本柱ですが、教育に関しては、コロンビア大学教授マリオ・サルバドリのとの出会いがその後の方向性を決めることになりました。サルバドリは建築学部意匠系学生に構造の本質を分かりやすく講義することで定評があり、そのことは望月先生の初めての翻訳である「建築の構造」(鹿島出版会)を読めばすぐに納得できます。先生はこの本を訳した後、客員研究員としてコロンビア大学に留学してサルバドリに師事し、その後のサルバドリの著書をすべて訳すことになります。その中でも私が最も感銘を受けたのは「建物が壊れる理由」(建築技術社)で、望月先生から頂いた本を今でも机の上に置いて時々読み返しています。

サルバドリは構造哲学に裏付けられた教育者という一面をもつだけでなく、ワイドリンガー・アソシエイツを通じて設計実務にも精通していたので、レズリー・ロバートソンやマッシス・レヴィといった構造設計界の大御所とも知己を得ることができ、「現代世界の構造デザイナー／アメリカ編」(鹿島出版会)などの著書を出版し、構造設計に関する多くのエッセーを専門雑誌に投稿されています。なお、サルバドリの親交については「マリオ・サルバドリとワイドリンガー・アソシエイツ」(建築技術社)に詳しく書かれています。望月先生にはサルバドリの名言集といえるものをいくつも教えていただきましたが、その中でも私が最も気に入っているのは「全体は単なる機械的综合ではなく、

部分を決定する固有の総体である」という含蓄のある言葉です。

私が望月先生との最初の共同作業に携わらせていただいたのは、現在でも建築構造力学の授業で教科書として使っている「建築構造のための力学演習」(鹿島出版会)の出版でした。初版が 1993 年ですからもう 20 年以上使用していることになります。この本の「第 1 章 構造的プロローグ」において、望月先生は力学と構造の関係性、構造設計における直感と経験の重要性、急速に進歩したコンピュータとの付き合い方の 3 点に絞って独自の構造哲学を展開しています。一方、望月先生との最後の共同作業となったのは、先生がリタイアされた後、レヴィに直接頼まれて「なぜ風は吹くのか」(鹿島出版会)を翻訳することになった時です。レヴィはサルバドリの第一の継承者であり、ワイドリンガー・アソシエイツの良心といえる人です。内容に関する問い合わせなどで実際にレヴィに連絡を取る機会が与えられたことは幸いでした。このような建築教育における数多くの業績に対して、望月先生は 2007 年度日本建築学会教育賞(教育業績)を受賞されました。このとき、望月先生から賞応募の推薦者になって欲しいと頼まれ、私には任が重すぎると感じながらもありがたうお引き受けしたことが思い出されます。

大学教員としてのもう一つの柱である研究に関しては、鉄筋コンクリート構造の権威として望月先生の名を知らない人はいないほど一つの時代を築き上げました。先生の研究室を巣立った学生の多くはこの研究テーマのもとで卒業論文や修士論文を作成しています。とくに、実験をベースとし、そのメカニズムを静的構造力学によりマクロに解釈する先生の能力は際立っており、先生と話していて私は何度も脱帽させられました。鉄筋コンクリート構造のなかでも先生がとくにこだわっていたのは耐震壁に関する研究でした。その研究への思いは「耐震壁物語」(鹿島出版会)を読むとよく理解できます。

望月先生は教育と研究の両面で実に多くの著書・訳書を世に送り出していますので、後に続く私たちは先生がすぐそばにいらして貴重なメッセージを送ってくださっていることを強く感じることができます。大学だけでなく媒体を使った広い教育の重要性はかねてから望月先生の持論でしたので、私たちが受けている恩恵もその一環ということになるのだと思います。最後になりますが、先生の奥様に研究室における一コマとしてのお写真を選んでいただきました。拙文に添えさせていただき、望月先生をお偲びしたいと思います。

女流ファイルー Part12

社会の多方面で活躍する女性卒業生を
順次ご紹介しています。

白井尚美

(H10 卒)

■file-64 あれから17年、40歳になりました



SHIRAI Naomi (旧姓：塩谷)
1998 年 武蔵工業大学工学部建築学科卒業（宿谷研究室）、1998 年 4 月～2003 年 3 月まで栃木県立高校教諭、2003 年 4 月から東京都立墨田工業高等学校 定時制教諭

大学を卒業して 17 年、栃木県の工業高校を経て現在は都立高校定時制で教鞭を執っています。私を知る人なら、玄能で鑿を叩くつもりがおもいきり指を叩いたり、つま先に単管パイプを落としたり、わけもわからずボクシング部顧問になりセコンドに立っている 40 歳の私の姿は容易に想像できると思います。生徒から先生と呼ばれるその意味は、先に生まれた人だけであることは十分承知しています。

建築家になりたいくて大学に進学したものの、奇抜なデザインを競い合うような授業の一方で、地球規模で深刻化する環境問題に対して建築は何ができるのかを考える授業があり、建築の正義を見つけたくて先生になりました。環境問題の解決には建築を扱う人間の教育が欠かせないとの思いに反して、生徒にはエクセルギー、エントロピーの話は子守歌にしかならず、大学時代から変わらない大声だけが授業中の睡眠妨害に役立っているようです。

現在、母親、技術者、研究者として活躍している優秀な同級生ではなく、今も未熟な私がこの原稿を書くことになったのは、勤務校の全日制が実施する講演会の講師が同級生の栗田君だったという偶然からです。講師名を見てこんなことがあるのかと驚きました。東日本大震災の被災者の方々に寄り添う栗田祥弘建築都

市研究所の活躍は、大学時代から変わらない栗田君の優しさが垣間見えるものでした。

こんなふうに活躍する卒業生の方と出会うたび、素晴らしい皆様と同じ大学で学べたことに誇りを持ち、恥じない生き方をしようと強く思います。夫は土木科卒の同期ですが現在は設計事務所でマンションやホテルの設計をしています。実務経験のない私にはありがたい存在です。勤務校全日制の野球部監督は電気電子科卒で準硬式野球部の後輩です。人ごみの駅前で、機械科だったの部活の同期を見つけたこともありました。今はスポーツライターとして活躍しているそうです。栗田君から建築業界の底上げにつながる教育の舞台の楽しさ、大変さなどを簡単に紹介してもらえたらと思い僕が推薦させて頂きました、というありがたい言葉をいただきましたが、工業高校の生徒の中には皆様の想像を超える生徒がたくさんいます。大変です。先生を悩ませ、困らせ、達者な言葉で反抗します。そんな彼らが社会に育てられ立派になった姿を見ることが今の私の働く原動力です。最後になりますが、もしかしたら教え子が皆様にお世話になるかもしれません。その時はよろしく願います。皆様のますますのご活躍を心よりお祈り申し上げます。

(東京都立墨田工業高等学校)

■file-65 進路を決めるということ

伊瀬知侑子

(H17 卒)

ISECHI Yuko
2005 年 武蔵工業大学工学部建築学科卒業（勝又研究室）、2005 年 東急ホームズに入社、注文住宅部門の設計として配属され、現在に至る。



然と思っていたわけですが、中々就職が決まらない中で、とにかく設計職に就きたいと思って活動していました。希望の設計部門に配属になった時は嬉しかったですね。最初は、やはり CAD オペや積算等、先輩方の補助的仕事でしたが、2～3 年目からお客様との打合せに出掛け、要望を聞きプランを書き、着工させるという所謂住宅メーカーの設計を今現在までしています。住宅メーカーの仕事は、大学時代、雑誌や展示会にある様な建築物とは異なり、商品化されたモデルを軸に設計し、商品を「売る」という感覚が強いです。必ずしも自分が良いと思っているものを作るわけではないというのが、私にとっては社会に出るという事

(東急ホームズ)

■file-66 「あきらめなければ、成るように成る（と思う）」

木南沙織

(H12 卒)

KINAMI Saori

2000 年 武蔵工業大学工学部建築学科卒業（勝又研究室）、建築パース事務所退社後、セツ・モードセミナー美術科へ入学。個展、水彩教室（ワークショップ）、各種イベントを経て、現在水彩画作家 KINA として活動中。2014 年 絵本「泣けないサボテン」（文・なすかつら 絵・KINA）で Be 絵本大賞受賞。



私は水彩画の絵描きです。

建築時代の私だけを知っている人は「随分と柔らくなったねえ」と驚くように言います。それが「人柄」なのか、描く「絵」のことなのか・・・きっと両方なのだろうと思います・笑。

私は幼少期から絵を描くことが大好きな子どもでした。

「なんか静かなあとと思って覗いたら、アンタはずーと紙で遊んでるんよ」と母に今でも言われるくらい、紙さえあれば、何時間も大人しく過ごすことができる子どもでした。だから大抵母は私の傍に紙、鉛筆、あと子ども用のハサミを置いていました。絵を描くのと同時に、紙を切ること「ものを作ること」が好きだったからです。建築学科に進んだことを今振り返ると、それも私にとっては自然のことだったように思います。建築という仕事に直接携わらない今でも、あのころを思い出せば、楽しかったなと思いますし、私の仕事場や作品の所々には、そのころ得た知識や知恵が便利にちりばめられています。建築学科を出たのに、建築と関係ない仕事をしている私ですので、初めはこの原稿を書くこともお断わりしようと思いました。でもよくよく

考えると、大学での学びが全てではないのですが、何もなかったか？ということも決していない。学んで気が付くこともたくさんありました。私は建築設計が好きでしたが、中でもプレゼンテーションの作業が好きでした。自分で頭の中で想像したものを、人に見えるように形（模型）にする。絵（パース）にする。出来上がりが見象化してくると、興奮する。その工程がたまらなく好きだと気が付いたことは学生の頃の大きな収穫です。それも最初から最後まで自分でやりたいタイプ。建築ではちょっと無理ですが、絵本の世界ではそれが限りなく可能でした。（もちろん誰かとコミュニケーションを取りながらやる作業は感動も達成感も 2 倍、3 倍とあります。だからたまにはいいんですよ。）今私のやっている作業もすべてはプレゼンテーション、昔と何も変わりません。頭の中で「いいなあ」「素敵だなあ」と思っていることを目に見えるようにしているだけです。自分のことを徒然と書いてきましたが・・・、偉そうに言う私も、すべては途中です。よく道を迷い、うろろろしています。生きている間、ずっとこんな感じなのだろうな



ただ今制作中の物語「さんさいちゃん」
（文：なすかつら 絵：KINA）の絵と粘土人形

あとと思います。物事、適当になってしまいうこともありますし、迷うこと悩むこともたくさんありますが、ただ物を創ること、絵を描くことが好きなことだけはずっと変わりません。とりあえずその時その時、真剣にやる何かがあつて、好きで続けることができるものが傍にあるだけで、私は幸せだと思います。

いつか私が元氣におばあちゃんになった時、世界中の子どもたちと一緒に絵を描くこと、それが今の私の些細な夢です。

栗田麗香

(H10 卒)

■file-67 四十の半開き



KURITA Uraka (旧姓：佐藤)
1998 年 武蔵工業大学工学部建築学科卒業（野城研究室）、1998 年～2014 年 三井ホーム、2014 年～ 栗田祥弘建築都市研究所

ます。また事務所の経理的なこともわかったことがほうがいいと思い、簿記も勉強し始めました。前の会社では、新しいことをやる時には簡単な勉強会を開いてくれていたのに、個人事務所では当然ながら何でも自力でやらなければならず、本やネットで調べながら様々なものと格闘する日々を過ごしています。人生は日々勉強です。今は雑用の一部しか手伝えていませんが、図面修正やプレゼン修正など、もう少し戦力になれるように色々覚えたいと思っています。住宅メーカーでは、たまに現場見学に行くこともありましたが、手元にある仕事をさばくのみで、結局自分の担当した住宅がいつ着工し引渡したかよくわかりませんでした。しかし今は契約や入金まで係わるので、仕事の実感や責任を重く感じています。生きるも死ぬも自分達次第なので、食べていけるように頑張っていきたいと思っています。

(栗田祥弘建築都市研究所)

社会をデザインする先駆者が語る

インタビュー：第3回「環境・設備を極める」

如学会・青年委員会

建築とは「社会をデザインする」こと。本特集では、ここに多様なアプローチで活躍する中堅・若手の卒業生をご紹介します。今回は、3人の環境・設備設計者に語って頂きました。

それぞれの考える「環境・設備」とは

学部時代を振り返っても、環境・設備については、何を学んだかあまり記憶に残っていないという方も少なくないのではないのでしょうか。インタビューを前に環境・設備設計者に抱いていたイメージは、空調や配管を得意とする専門家というものでした。宿谷研究室出身の3名から語られた言葉には、年齢とキャリアは異なりますが、自然環境と住まい手の生活への「愛」という共通項がありました。

設計のみならず、エンドユーザーに環境デザインの意図を伝えることに大きな力を注ぐ廣谷氏

「私は、環境・設備、環境をデザインすることとは、自然を活かした心地よい住まいと暮らしを提案することと考えています。環境建築、パッシブ建築を『つくる』こと、自然を活かした住まいの良さが発揮できる使い方を支援する『つかう』ことに関するコンサルティング、環境建築の心地よさや技術などを子どもから大人、学生から技術者に向けて『つたえる』ためのワークショップの企画や教材開発など、これを実現するために、3つの「つ」に関する仕事をしたいと、みつつデザイン研究所を設立しました。」

自身の考える環境デザインの在り方をドイツで模索し、それを日本でそれを形にしつつある小室氏

「設計とは、ただ単に建物进行ることや、建物に設備を入れ込むことではなく、自然や人への『気配りや気遣い』だと考えています。独立して事務所を立ち上げた今は、自然の動きとうまく付き合える、『環境と交感』することのできる建築はどうあるべきかを考えて仕事をしています。」

空気や水、熱の流れをデザインする面白さに気づき、環境工学に進んだ星野氏

「建築環境における空気や水、熱の流れを数値化し、人の体感と結びつけることが環境工学の魅力の一つと考えています。学部時代に得たこの視点から、その場でその人がどういう生活をしたのかをイメージし、建物によって文化を創ろうとする意匠設計者に環境建築を提案しています。」

環境・設備系の研究室を選ぶきっかけとは

3名から共通して聞かれたのは、設計製図の講義演習を続ける中で感じた漠然とした疑問でした。設計課題に取り組む際に、設計者として建物の設計における具体的な拠り所となる判断基準や、建築に対する価値観を見いだせずにいたと言います。そんな迷いの中で、設計に対する揺るぎない基盤として見出したのが、宿谷教授の講義で展開される「光や太陽などの自然エネルギーを活かした気持ちよい建築デザイン」でした。

小室「入学当初から意匠に興味があったので、設計製図の講義演習をずっと履修していました。でも出される課題に魅力を感じなかったのです。次第に光や太陽といった自然の働きかけを拠り所にするデザインの面白さに気持ちが動いていきました。振り返ってみると、1年生のときに受講した宿谷先生の講義の影響が最も大きかったと思います。今でも覚えています。確か1回目の講義で先生が黒板に書き出したのは、土地や敷地でなく、“地球の絵”だったのです。それは私にとってかなり衝撃的なことでした(笑)。」



一級建築士事務所 エネクスレイン
H3卒（宿谷研）
1993-1998年 梓設計 設備設計に従事、1999年 シュトゥットガルト大学 都市計画建築学科、2000年 HHS/ヘッガー・ヘッガー・シュライフ・アルヒテクテン・BDA/ドイツ・カッセル、2001年 G+S/ガーターマン+ジョッスィヒ・ウント・パートナー/ドイツ・ケルン、2007年 一級建築士事務所 エネクスレイン/enexrain 東京に開設、2009年 ケルン工科大学建築学科 建築保存と再生に関する専門課程 修了、2011年第2回北型住宅賞 優秀賞受賞「家族と太陽が交感する住まい」
HP：www.enexrain.com

小室大輔

H03 卒

エネクスレイン

廣谷「バブルがはじける前後に学部で建築を学んだのですが、様々な既存の価値観が壊れていくなかで、設計の課題や評価に今一つピンとこない毎日が続いていました。その頃に受けた宿谷教授の環境工学の講義で、自然光を取り入れた建物を考え、図面と“のぞける箱”で表現するという演習がありました。箱を屋外に出して、光の動きを体感してプレゼン資料にまとめるというものです。ここで、初めて、自然のポテンシャルを活かすこと、環境デザインの面白さに気づかされました。そこから、環境工学的な視点からの設計をやりたいという気持ちが強まり、宿谷研に入れて頂きました。当時、実験やシミュレーションがメインの研究室だったのですが、先生にお願いをして、卒業設計までやらせてもらいました。」

星野「学部2年時に履修した“地学”の一貫で参加したフィジエ実習での経験がきっかけだと思います。ブロック・茅葺・トタンでできた住宅と最低限の電気・ガス・水で暮らす村で、家の中は暑いから昼は木陰で過ごすと言っている女性に会いました。日差しも強く暑い日でしたが、木陰の中はすごく涼しく、このような空間を建築で再現して、気持ちよく過ごせるようにしたいと強く思いました。空気・熱の流れを深く知るためにたどり着いたのが宿谷研究室でした。宿谷先生は既に横浜キャンパスへ異動されていたので、最初は緊張しました。」

就職、そして現在の環境・設備設計者としてのスタイルに至るまで、どんな道を歩んできたのか

「環境・自然をデザインする」というはっきりとした想いを持っての就職ではありましたが、今に至るまでには、それぞれの異なる試行錯誤の日々の繰り返しがあったようです。ここで迷いながらも今の立ち位置に到達できたのは、卒業後も続く恩師宿谷教授とのつながりが大きかったと言います。

廣谷「宿谷研究室では、常に『君はどうしたいの?』『どうして、なんでそう思うの?』と問われます。と共に、自分でちゃんと考えて出した答えについては、先生はいつも応援者、理解者として指導してくださいます。そんな研究室ですから、社会に出てやりたいこと、解りたいことが明確になってから研究室に戻ってくる人も多いのではないのでしょうか。私自身も建築設計事務所に就職して数年を過ごした後に、宿谷研究室の修士課程に戻りました。卒業研究では設計というアプローチで取り組みましたが、再度、理論的な視点で環境をデザインすることを学びなおしたいという気持ちがあったからです。修士を終えてからは、環境省系の事業で、小中学校のエコ改修モデルを作る全国プロジェクトの事務局に就職し、宿谷先生にも関わっていただきながら、住まい手（教師や児童生徒）、と設計者をつなげる取り組みに関わりました。ここでの6年間では、その建物のもつ意図（環境デザイン）を住まい手に伝える重要性和難しさを実感しました。自然光利用、通風効果、断熱性の確保といった業界では当たり前に使われているような言葉だけでは、使用者への使い方に対する説明にはなっていないという、当たり前の事実に気づかされました。そこで、今のみつつデザイン研究所を立ち上げました。」

小室「卒業後、私は組織事務所の設備設計部に就職したのですが、空調設備など、機械ですべて解決してしまう設計のあり方に疑問を感じる毎日でした。そして次第に、環境からの働きかけを活かしたデザインをしたいという思いが強くなったことから、入社して5年目に1年間、休職させてもらい渡独しました。その理由は、光や風を上手く取込むドイツ流の建築デザイン手法を学びたかったからです。結局、休職期間の終了とともに退職し、ドイツの意匠設計事務所へ移りました。それから紆余曲折があり、宿谷先生には何度も相談に乗って頂きました。そんなとき『君のやりたいことは、世界中、どこを探しても見つからないよ。それは自分でつくり上げて行くことなのではないですか』という貴重な助言を頂いたことから、エネクスレイン・enexrainという建築士事務所を設立するに至りました。「en」は物質の拡散の度合いを示す「エントロピー/entropie」、「ex」はエネルギーの質を示す「エクセルギー/exergie」、「レイン/rain」は「雨」を示し、地球上の生命活動をつかさどる大切な『物質の流れや循環』を大きく捉えたいという気持ちを託しています。それらはいずれも宿谷研で学んだことばかりです。

住まい手と自然環境をつなぐ建築をつくりたい

星野「私は修士を終え、テーテンス事務所という設備設計事務所で空調・衛生の設計をしています。結婚、出産を経て現在も続けています。子供は生後半年から保育園に通い、私も仕事に復帰しすぐに忙しくなりましたが、子供が急に熱を出したり、家事があったり、何においても十分な対応ができませんでした。やりたいこととできることのバランスが取れていないことに気づき、それでも建築環境に関わり続ける気持ちが大きかったので、今は仕事を減らしこの先に繋げていくと決めることができました。また今の会社で続けたい希望も強かったので、話し合いを重ねようやく現在の仕事スタイルを確立できました。私は周囲に恵まれておりここに至りますが、現在の日本には悩みながら働き子育てしているお母さんは多いと思います。私も仕事を減らしたことによるジレンマも続いています。母親目線で伝えられることもあると期待しています。例えば、上手に汗がかけられる体になるには乳幼児に過ごす環境が重要であることを研究室で学び、保育園の設計では、建物の断熱や遮熱を行なった上で、室内湿度を整え空気を冷やし過ぎず、程よく汗をかける『やんわり』空間を提案しています。」

星野氏からは、こども建築環境の改善という、働く母親目線と環境・設備設計者としての想いが語られました。独立して数年経つ小室氏と廣谷氏からは、就職して感じたフラストレーションや疑問をいよいよ形にしていくための新たな挑戦が挙げられました。

星野「建築環境視点ですが、妊娠中に見学した保育園の中には、一般事務所に少し手を入れたような空間も沢山ありました。私もそうでしたが、待機児童が多い現在は保育園に入れることに精いっぱい、質まで選べない状況です。今後は、さらに働くお母さんが安心して預けられるこども建築環境を増やしていきたいと思っています。」
小室「例えば屋上緑化には、断熱性能の向上といった数値評価できるものと、そこに飛んできた鳥を見て精神的に癒されるといった数値化できない効果があると思います。この両方の視点から、未だ日本には無い、“自然環境からの働きかけと交感する建築”の在り方を探っていきたくと考えています。」
廣谷「設計者として建物をつくることは続けていきますが、さらに力をいれていきたいのは、住まい手・使い手に環境デザインの意図や自然を活かした使い方を伝え、使用者から愛される環境建築を作るための仕掛けづくりやワークショップ等の企画をしていきたいと考えています。これだけで生活できるほどのフィーがもらえる仕事ではありませんが、社会を変えて行く為に誰かが担わなければいけないこと、今こそ必要なことだと感じています。」

ご自身の経験から、現役の学生さんや若手にアドバイスを

社会をデザインする先駆者たちから共通して語られたのは、新たな時代の設計者、専門家に求められる「意匠・構造・環境・設備を一緒に考えられる」視点でした。

廣谷「非常勤講師で教えて気がついたのですが、環境をデザインする手前の、太陽は動き、東西南北等方位によって環境条件が異なるという認識すら薄い人が多い様に感じています。一方で、ワークショップなどで出会う主婦や子ども（住まい手・使い手）の方が風や日光などの自然の動きに敏感です。つまり、そういう人たちが施主であるということです。設計の仕事をするのであれば、学生時代に自然環境を捉え、省エネルギーで快適なシェルターを作ると言う視点で各要素を構成する力を養うことが必要ではないでしょうか。設計課題の中でも、そのような視点でのトレーニングがもっと増えればいいのに、と思っています。」

星野「設計の早い段階で断面を描くことが大事だと思います。構造梁や機器、ダクト、配管、電線の経路を意識した断面は空間の制限がですが、住まい手の生活がイメージでき、良い建物にしたいと共感がうまれます。今までの経験上、断面図のない打ち合わせは盛り上がりません。断面図がしっかり描かれた建物は、美しいだけではなく建物と住まい手への愛情が感じら

廣谷純子

H07 卒

みつつデザイン研究所



みつつデザイン研究所
H7卒（宿谷研）1995年 工学部建築学科卒業、1995～2003年 野沢正光建築工房、2003～2005年 環境情報学研究科宿谷研究室在籍、2005～2011年 オーガニックテーブル（現 エコエナジールボ）、2011年 みつつデザイン研究所創業、2014年 みつつデザイン研究所設立
HP：http://www.mittudesign.com/

れるのです。学生の今だからこそ、コンセプトや見え方もそうですが、住まい手の立場になった断面図を丁寧に描いてほしいです。」

小室「廣谷さん、星野さんの意見にもう一つ加えたいことがあります。どの分野の設計者になっても、例えば敷地を見に行く時点から、意匠だけではなく、構造、環境・設備の設計担当者が皆で現場に行って、一緒に話し合う舞台作りを心がけてはどうかと思っています。また、個人的には、建築と環境・設備を結ぶ環境デザインという職能を確立したいとの思いもあります。これには、私一人の動きでは限界がありますので、後に続くくれる学生さんや若手の方々と協働して行きたいですね。」

インタビューを終えての感想

澤岡 それぞれの言葉で語られる環境・設備設計への想いや課題意識は、人の行動やつながりの視点からまちづくりや住いを提案したいと考え今の道（超高齢社会のつながりのあり方を追求する老年社会学の研究者）に進んだ私には、全て頷くことばかりでした。同時に、平面図を書き上げてから、そこに空調などを無理やりはめ込んできた学生時代の自身の意識の低さを反省した時間でもありました。誰もが豊かに歳を重ねる社会をデザインしていく為にも、今回の3人の様な専門家がが増えていくこと、環境・設備や構造、人の行動などをトータルに捉える視点をもつ意匠設計者が育っていくことを願います。

三好 3名が宿谷教授を愛していることを伝えられたらと思います。武威工業大学の建築学科に入り、宿谷教授と出会い、そして今も研究室を通じた密なつながりがあることを、とめて誇らしげにお話し頂きました。また東日本大震災の際、宿谷教授は研究室の卒業生に、放射能について書かれた手紙を送って下さったそうです。それは、シベリ、ベクリの意味、今起こっている事態について、冷静に考えるヒントを丁寧に書き綴ったものでした。このように慕われている先生方がいらっしゃる大学だということは、とても素晴らしいと思いました。

星野佳子

H18 卒

テーテンス事務所



テーテンス事務所
H18卒（宿谷研）
テーテンス事務所に勤務。現在は保育園・幼稚園を中心に手掛けている。2006年 工学部建築学科卒業、2006～2008年 環境情報学研究科宿谷研究室在籍、2008年 テーテンス事務所入社 設備設計・監理業務に従事
2012年 東北建築賞・特別賞受賞
「あきたチャイルド園（意匠：サムコンセプトデザインー級建築士事務所）」
2015年 東北建築賞・特別賞受賞
「かなや幼稚園（意匠：石嶋設計室）」

聞き手：青年委員会

澤岡詩野（H10卒）

三好敏晴（H10卒）

如学会2015年度 定期総会・講演会・懇親会報告

総務副委員長 小林 秀憲 (S57卒)

2015 年 6 月 6 日 [土] 会場：渋谷エクセルホテル東急

1. 2015年度定期総会

如学会定期総会は、遠方からも会員が参加し、総勢 91 名の出席者となった。山岡会長の挨拶より総会が始まり、議事が執り行われた。最初の議案は、丹羽総務委員長より発議され、常任理事会にて推薦された山岡氏が引き続き会長に承認された。その後、新たに監事として阿部肇、小辻武両氏の選任の承認、2014 年度事業報告が承認された。つぎに露木財務委員長より 2014 年度収支決算の報告がされ、小辻監事が同会計監査報告を行い承認された。2015 年度の事業計画、収支予算についても承認された。今年度の「100 人展」が 10 年を迎えることにより「美術館展」の開催、その記念誌の出版が予定されている旨の報告がなされた。斎藤博、丹羽譲治、舟岡努、露木博視、小林秀憲 5 名の新副会長が、山岡会長より紹介された。また、尺田知己、酒井孝博、小林捨象、藤井研一 4 名が校友会幹事に就任された報告が行われた。

2. 講演会

三木千尋東京都市大学学長による「社会インフラの老朽化を考える」と題した講演会が行われた。三木学長は、これから東京都市大学では 20%の学生を海外へ出し、国際標準の大学をめざしていくとの新たな意気込みを話された。講演では、社会資本施設は、古い技術が用いられ使用環境が厳しい上に、社会的な重要度が高く建て替えができない。老朽化によって更新・維持費が急増している。最近になって、メンテナンスの重要性が見直され、国土交通省が平成 25 年をメンテナンス元年と宣言した。学長は、「今すぐ本格的なメンテナンスの舵を切れ」と警告された。老朽化したインフラには、きちんとした点検と診断に基づいた素早い対応が必要で、専門的な知識をもった技術者の育成が急務である。民間のレベルを高めメンテナンス業務をビジネスとして成り立たせる必要がある。また、新しい技術として、橋などの劣化状況を、センサーを活用したモニタリングによって、ミニマムコストで安全・安心を維持できるようになると話された。学長の技術者としての真摯な姿勢を感じることができた。

3. 懇親会

懇親会は、小林副会長、基青年副委員長の司会進行により執り行われた。山岡会長の挨拶より始まり、10 周年記念の「建築 100 人展」の開催、さらに学生に好評の進路ガイダンスの開催などについて話をされた。来賓としてお招きした校友会副会長の皆川勝様、建築学科勝又英明主任教授よりご挨拶の言葉を頂いた。建築学科元教授の鈴木様のご登声により一同乾杯し、幕を開けた。しばらくの歓談の後、日本建築大賞を受賞された堀場弘教授、日本建築学会(作品)賞を受賞された福島加津也専任講師両氏にその功績を称え功労者表彰を行い、お話を頂いた。最後に吉田校友会副会長より、如学会の歴史や如学会への励ましの言葉を頂いた。

会費・支援費納入のお願い

如学会で催される様々な事業は会員の皆様の会費で賄われています。今年度も多数の会員の皆様から会費、支援費の納入を賜りました。誌面をお借りして厚く御礼申し上げます。

平成20年度から導入された会費4年分10,000円という割引制度が、郵便局への為替振込の簡便さもあって、4年分一括納入の会員の方が増えています。ただし年度毎に振り込む習慣がなくなるので、会費切れをお忘れになる方もいらっしゃる。如学会NEWSと別刷りの会員データシートの会費欄、会費納入者リストをご確認頂き、会費切れの方は会費納入の程、よろしく願います。また4年前に導入された支援費制度も定着してきまして、毎年多数のOBの皆様からご支援頂いております。支援費につきましては、年度毎に会員の皆様の篤志を仰ぐ制度となっております。既に4年分の会費をお納めの皆様も、支援費のご協力についてよろしく願います。

会 費：3,000円/1年分・10,000円/4年分
支援費：5,000円/1口

納入頂ける方は必ず内訳をご記入の上、振込頂くようお願いいたします。如学会NEWSに同封の専用の振込用紙を用いない場合は下記口座をご利用ください。

郵便局 払込取扱票 No.00160-0-174206 如学会

2016年度定期総会・講演会・懇親会のご案内

来年、2016年度の定期総会を開催します。本年同様、「同窓会」として位置づけており、お誘い合わせの上、多数のOB、OGの参集を期待しております。

期 日 2016.6.4 [土]
会 場 渋谷エクセルホテル東急

詳細は「如学会NEWS」2016年春号に掲載します。



定期総会



三木千尋学長の講演



来賓の校友会副会長 皆川勝氏のご挨拶
建築学科を代表して 勝又英明主任教授のご挨拶



懇親会の様子



日本建築大賞を受賞された 堀場弘教授



日本建築学会(作品)賞を受賞された 福島加津也専任講師
蔵田賞・赤レンガ卒業設計展審査委員賞受賞模型

如学会 2014年度収支決算及び2015年度予算案

2014 年度決算：2014/4/1 ～ 2015/3/31 2015 年度予算：2015/4/1 ～ 2016/3/31

【会計】 (単位＝円)

年度		2014年度決算			2015年度予算	
		2014年4月1日～2015年3月31日			2015年4月1日～2016年3月31日	
収入の部	科目	予算	実績	対予算	予算	備考
	会員会費	1,900,000	2,064,000	164,000	1,760,000	120人×3,000(1年分)+140人×10,000(4年分)
	支援費 500,000	540,000	40,000	520,000	65人×8,000	
	総会 630,000	714,000	84,000	700,000	100人×7,000	
	常任理事会	175,000	374,000	199,000	200,000	懇親会:20人×5,000×2回
	理事会				350,000	懇親会:70人×5,000
	100人展	1,400,000	1,419,000	19,000	2,050,000	出展料85点×7000+協賛費80万+祝金等
	スキルアップ特別講義				20,000	新規事業:参加費5名×1,000×4回
収入合計	校友会支援費		635,000	635,000	635,000	
	その他 100,000	156,407	56,407	100,000		広告収入他
		4,705,000	5,902,407	1,197,407	6,335,000	

支出の部	科目	予算	実績	対予算	予算	
NEWS	制作費 春	400,000	360,150	39,850	400,000	2,500部
	制作費 秋	400,000	343,440	56,560	400,000	2,500部
	発送費 春	200,000	182,515	17,485	200,000	送料 封筒代含む
	発送費 秋	200,000	189,496	10,504	200,000	送料 封筒代含む
	取材費	50,000	0	50,000	70,000	「若手・中堅OG/OBの発掘 …」3,200円×2回×2(春秋)を含む
	NEWS計	1,250,000	1,075,601	174,399	1,270,000	
会議費	総会	622,500	773,025	▲ 150,528	58,000	会場費:71万、印刷費:3万、パネル運搬費:7万、 学生参加費
	常任理事会	70,000	245,557	▲ 175,557	300,000	貸室料、懇親会:20人×5,000×2回
	委員会	40,000	41,323	▲ 1,323	350,000	懇親会:70人×5,000
	職域交流会	235,000	208,000	27,000	40,000	
	会議費計	967,500	1,267,905	▲ 300,405	1,548,000	
主催事業	トーク	30,000	10,000	20,000	10,000	御車代
	研修旅行	30,000	0	30,000	0	
	100人展	600,000	570,711	29,289	1,650,000	上野の森美術館会場費84万円、 美術館展用パネル代27万、懇親会費他
	特別講座		0	0	150,000	交通費15名×5,000、懇親会:75,000
	進路ガイダンス	200,000	164,020	35,980	200,000	昨年実績:企業72社、学生参加、文具代、懇親会
	ワークショップ(青年委員会)	60,000	60,000		150,000	いわきで支援機関の記録小冊子の作成(1000部)
	スキルアップ特別講義			0	32,800	会議室3,200円×4回、講師交通費4名×5,000
	主催事業	920,000	804,731	115,269	2,192,800	
学生関係	助成金	100,000	90,000	10,000	90,000	学園祭時に3研究会へ
	蔵田賞他	110,000	162,000	▲ 52,000	140,000	蔵田賞、如学会、赤レンガ卒業設計展
	学生関係計	210,000	252,000	▲ 42,000	230,000	
管理費	事務員	300,000	271,000	29,000	135,000	経理業務電子化による作業量削減
	アルバイト	100,000	0	100,000	100,000	
	人件費計	400,000	271,000	129,000	235,000	
	慶弔費	100,000	75,750	24,250	100,000	
	通信費	30,000	12,042	17,958	20,000	
	交通費	50,000	41,140	8,860	50,000	
	事務用品	100,000	21,084	78,916	50,000	
	印刷関係	150,000	154,299	▲ 4,299	150,000	
	振込料	50,000	30,120	19,880	50,000	
	支部出張費	30,000	0	30,000	30,000	
	予備費	150,000	100,000	50,000	100,000	
	管理費計	660,000	434,435	225,565	550,000	
支出合計		4,407,500	4,105,672	301,828	6,025,800	

科目	予算	実績		予算	
収入合計	4,705,000	5,902,407		6,335,000	
支出合計	4,407,500	4,105,672		6,025,800	
収入合計-支出合計	297,500	1,796,735		309,200	
次年度繰越金	4,110,000	1,796,735		309,200	

預金残高 現金	郵便局 (定期)	郵便振替口座 (会費用)	三井住友銀行	みずほ銀行 (普通)	口座計	現金	合計	
	7,356,000	157,020	759,543	2,254,243	10,526,806	26,537	10,553,343	

東京都市大学「建築 100 人展 2015」／ 10 周年記念展

2015.10.31 [土] - 11.01 [日]

大学展 10:00-18:00 入場無料

会場：建築学科 1 階 グランドギャラリー

10 周年記念として今迄の各自の「代表作」を展示

2015.12.16 [水] - 12.24 [木]

美術館展 10:00-18:00 入場無料

会場：上野の森美術館

10 周年記念として今迄の各自の「代表作」を展示

- 10 周年記念として従来の銀座展を美術館展としました。
上野の森美術館では、建築関連の展示をしたことがなく、大変期待されております。
従来の銀座展のスペースより 25㎡大きく 100㎡。
天井の高さは、均一ではありませんが、3,295mm ～ 3,880mm あります。
ガラスの風除室から直接ギャラリーに入出でき、本館からの出入りも可能です。

「建築 100 人展・10 周年記念誌」を発刊

- オープンにあわせて 10 周年記念誌を発刊いたします。
10 周年記念誌は、出展者以外の方も購入できます。
会期中に、会場でお買い求め下さい。

本文 P14-15 参照

東京都市大学
建築学科同窓会誌



卒業生 100 人の活動を集めました。

主催：東京都市大学建築学科同窓会和学会
共催：東京都市大学建築学科

祝！10周年
建築 100 人展
2015

大学展 2015.10.31 ▶ 11.01 | 美術館展 2015.12.16 ▶ 12.24
東京都市大学 世田谷キャンパス 建築学科 上野の森美術館
東京都市大学 世田谷キャンパス 建築学科 上野の森美術館
アパレル・大規模商業施設・小規模施設
建築設計事務所・建築事務所
建築設計事務所・建築事務所
オープンイベント・2015.12.16 (水) 18:00

編集後記

昨年の秋号に続きお二人が、受賞されました。堀場弘教授の日本建築大賞と福島加津也専任講師の日本建築学会（作品）賞です。
賞の決定に審査員が重要な役割を果たします。審査されるのは応募者でなく審査員であるように思えます。審査会に出席された先輩によると、審査員による壮絶な戦いが繰り広げられる時もあるらしい。審査員の力量が問われます。
関連した事項で話題になったのは、2020 年の東京オリンピックで競技場の当選案の白紙撤回でした。残念なことに、戦う建築家が逃げ腰でした。新たなコンペで卒業生が勝利して欲しいと願います。続いて、オリンピック・パラリンピックのエンブレムも白紙撤回され、デザインのオリジナリティとは何かが問われました。今回の号も充実した内容です。
是非ご堪能下さい。 丹羽謙治

各事業の申し込み
問い合わせ先
総務委員長
丹羽謙治
TEL:03-5790-8082
FAX:03-5790-0654
E-mail
jogakkainews@gmail.com

発行人

山岡 嘉彌

情報委員長・編集長

丹羽 謙治

編集顧問

松成 和夫

編集委員

酒井 孝博

勝又 英明

白川 敬

山口 裕照

鈴木 浩

エディトリアルデザイン

山岡 嘉彌

制作

鈴木 浩

奥山 美緒

制作・印刷

株式会社 はやと企画

発行

東京都市大学建築学科如学会
東京都世田谷区玉堤 1-28-1
〒158-8557

発行日

平成 27 年 (2015 年) 10 月 1 日

進路ガイダンス 2015

2015.11.25 [水] 13:00-19:00

場所・東京都市大学 世田谷キャンパス

- 第 1 部 事業別仕事紹介 13:00-15:45
会場：建築学科棟 1 階「グランドギャラリー」
OB の講師の方々から概略をお話しいただきます。
- 第 2 部 企業別仕事紹介 16:00-17:30
会場：3 号館 4 階「メモリアルホール」(予定)
OB の方々と直接お話をさせていただきます。
- 第 3 部 懇親会 17:30-19:00
会場：1 号館 4 階「ラウンジ・オーク」
立食形式の懇親会で、参加無料です。

定期総会・講演会・懇親会

2016.6.4 [土] 15:30-20:00 総務委員会

- 15:30 ● 定期総会 ● 渋谷エクセルホテル東急
- 16:30 ● 休憩
- 16:45 ● 講演会
- 17:45 ● 休憩
- 18:00 ● 懇親会
- 20:00

※詳細はメールマガジンで追ってお知らせします。
HP もご覧下さい。

会費・支援費納入のお願い

是非とも旧友、先輩、後輩にご連絡いただき、会費納入の
促進にご協力いただけるようにお願いいたします。

会費：1 年分／3,000 円・4 年分 (割引)／10,000 円
支援費：5,000 円／一口

納入頂ける方は必ず内訳をご記入の上、振込頂くようお願い
致します。如学会 NEWS に同封の専用の振込用紙を用いない場
合は下記口座をご利用ください。

郵便局 払込取扱票 No. 00160-0-174206 如学会

メールアドレスのご連絡を

メールマガジンでタイムリーな情報をお伝えします
(現在 1,200 名の登録会員に最新の情報をお届けしています。)

「如学会 NEWS」では掲載しきれないタイムリーな情報を皆様
にお伝えるため、メールアドレスの充実が早急の課題となっ
ています。是非とも皆様のメールアドレスをご連絡下さい。住所、
電話番号の変更のある方もご連絡下さい。住所、
情報委員会では「ホームページ」の充実と、「メールマガジン」
(8 月 27 日現在 175 号を発信) の随時発信をしております。

連絡先：会員委員長・小林捨象
E-MAIL:stezo@kje.biglobe.ne.jp

協賛会社・新日本法規出版の出版物案内のパンフレットを同封して
おります。